

當麻寺二十五菩薩来迎会 (聖衆来迎練供養会式) 調査報告書 2020

Taimadera Nijugobosatsuraigoe

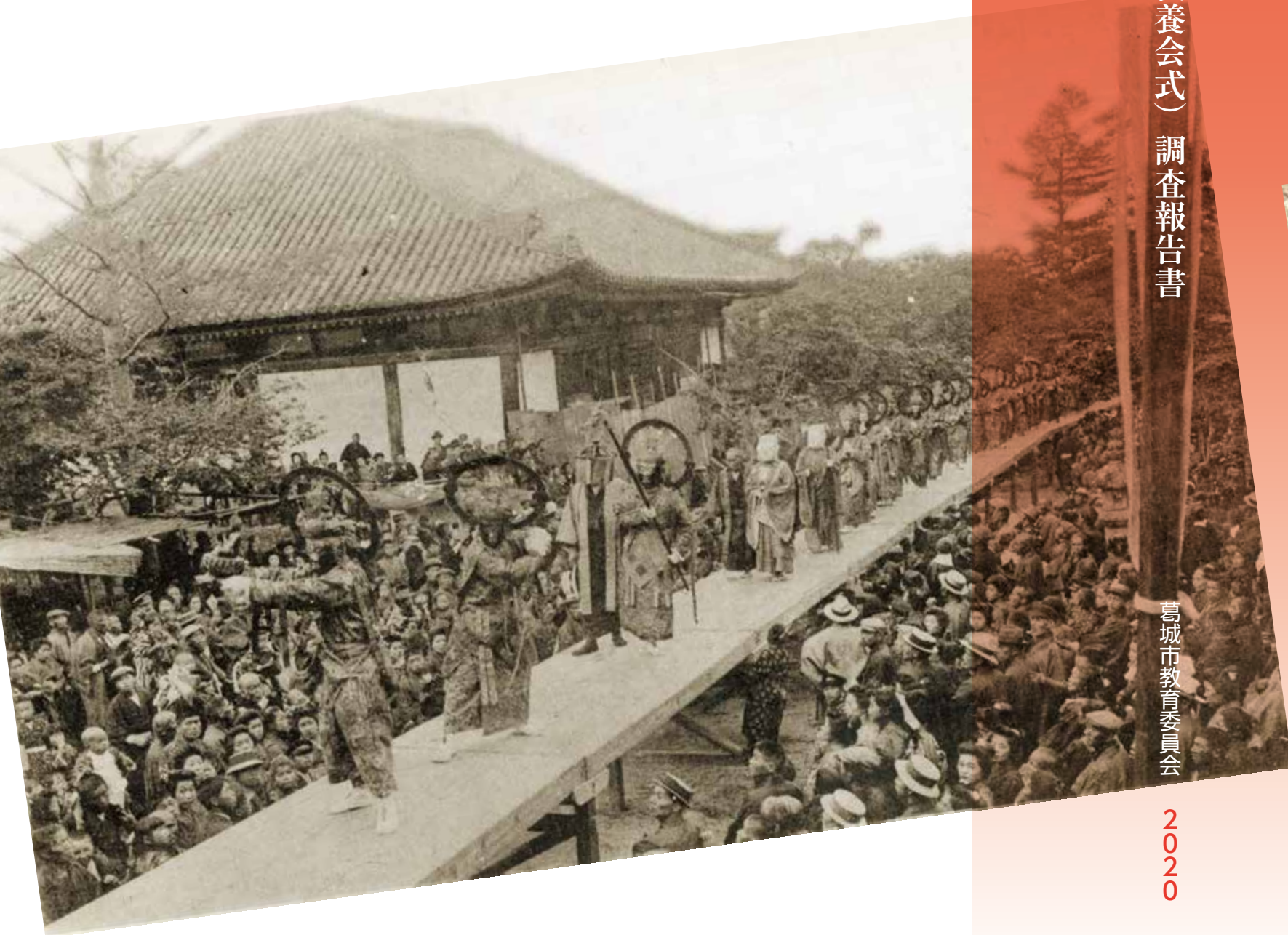
葛城市教育委員会

當麻寺二十五菩薩来迎会 (聖衆来迎練供養会式) 調査報告書

葛城市教育委員会

2020

表紙写真 大正～昭和初期頃 當麻寺
裏表紙写真 平成30年5月14日 當麻寺



當麻寺二十五菩薩來迎會
(聖衆來迎練供養會式)
調 査 報 告 書





當麻寺本堂（曼荼羅堂）から来迎橋を渡り、娑婆堂へ向かう菩薩衆。天童、地蔵菩薩をはじめ諸菩薩が娑婆堂に向かう。大正から昭和初期頃の絵葉書。



「練初め」の日、護念院本堂内で菩薩講の人々が集まる中、練供養当日娑婆堂内で観音菩薩と勢至菩薩によって、法如（中将姫）化生坐像を極楽浄土に迎える所作（奉奏舞）が演じられる。



法如（中将姫）化生坐像が乗った蓮台を持つ観音菩薩を先頭に、娑婆堂から西方極楽浄土世界に見立てた當麻寺本堂（曼荼羅堂）へと菩薩衆が練り歩く。平成21年5月14日



観音菩薩、勢至菩薩、普賢菩薩の後に続く、菩薩衆。平成25年5月14日



重要文化財「當麻寺縁起 下巻」(享禄4年〈1531〉) 當麻寺蔵 に描かれた練供養の場面。本堂を出て娑婆堂の前に到着した菩薩衆。(画像提供：奈良国立博物館 撮影：森村欣司)

序 文

葛城市當麻に位置する當麻寺では、毎年四月十四日、夕陽が二上山へと沈むころに莊嚴な光景がくり広げられます。きらびやかな衣装をまとった二十五菩薩の先頭を、観音菩薩が力強い動作で、来迎橋と呼ばれる舞台を練り歩きます。

地元では「練供養」や「當麻連座」または「お練り」と言って親しまれるこの行事は、正式には「聖衆来迎練供養会式」と称されています。

この行事は、蓮糸で「當麻曼荼羅」を一夜のうちに織り上げたといわれる中将姫が、後に往生を遂げる時、阿弥陀二十五菩薩の来迎により西方極樂浄土に迎えられた、との伝承を再現した伝統行事です。現在では、大和の春を告げる風物詩のひとつともいえるこの行事のはじまりは古く、鎌倉時代にはその原型があったとされています。

そのような長い歴史をもつこの伝統行事の詳細を受け継ぎ、将来にわたって伝えていくために、葛城市教育委員会では、當麻寺・文化庁・奈良県のご協力のもと、さまざまな分野の諸先生方を専門委員としてお招きし、詳細な調査を実施することといたしました。平成三十年度より行事等を、當麻寺や菩薩講各組の皆様への聞き取り調査をはじめとして、現地施設や設備の様子、用いる衣装や音楽、関連する古文書の調査などを実施いたしました。また、各地の来迎会（練供養）についても、現地に赴いての調査を実施いたしました。

それらの成果についてまとめた本報告書が、今後、地域の伝統を後世に守り伝えていくための一助となることを期待したいと思います。

調査の実施・本報告書の刊行にあたり、ご支援・ご指導いただきました奈良県地域振興部文化財保存課、貴重な原稿を執筆していただいた専門委員や調査員の先生方、そして調査の実施を快諾し、ご協力いただきました當麻寺及び菩薩講の皆様をはじめ、各地で練供養等の行事を実施されている諸寺院及び関係者の皆様に深く御礼申し上げますとともに、今後とも本市の文化財保護行政に対し変わらぬご指導・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和二年三月

葛城市教育委員会

教育長 杉 澤 茂 二

目次

口絵	
序文	
目次	
例言	
第一部 調査報告	
第一章 當麻寺練供養会式の概要と総論	森本 仙介 1
第二章 當麻寺の歴史と練供養の起源および継承	吉井 敏幸 6
第三章 當麻寺練供養における諸堂の準備と荘厳	山本 潤 22
第四章 練供養会式の行事次第	福持 昌之 26
第五章 練供養会式における所作と芸態―観音菩薩・勢至菩薩を中心に―	福持 昌之 41
第六章 菩薩講を構成する各組の歴史と現状	上田 喜江・猪岡 叶英 54
第七章 當麻寺と當麻区の年中行事	吉村 旭輝 67
第八章 練供養における雅楽の歴史と現状	出口 実紀 72
第九章 當麻寺来迎会和讃の旋律様式と迎講音楽前史	田鍬 智志 77
第一〇章 練供養における現行の菩薩面・持物・輪光	吉岡 昌信 94
第十一章 木造阿弥陀如来立像と木造来迎会所用面	神田 雅章 106
第十二章 當麻寺二十五菩薩来迎会の装束（附 装束類調査の記録）	藤井 健三 115
第二部 特 論	
第一章 平安期浄土教儀礼の世界	船田 淳一 163
第二章 迎講を創り営む聖人たち―迎講をめぐる説話を読む―	阿部 泰郎 174
第三章 大坂梅田練供養図のこと	福原 敏男 181

第三部 各地の来迎会（練供養）調査報告

1	浄真寺（東京都世田谷区）	大東 敬明	185
2	十念寺（長野県小諸市）	村田 幸子	188
3	蓮華寺（愛知県あま市）	猪岡 叶英	192
4	地藏堂（愛知県愛西市）	上田 喜江	195
5	西蓮寺（三重県伊賀市）	奥村 晃代	197
6	新善光寺（滋賀県栗東市）	大西 稔子	200
7	阿弥陀寺（滋賀県栗東市）	大西 稔子	203
8	光明寺（京都府長岡京市）	田 敏 智志	209
9	即成院（京都府京都市東山区）	福持 昌之	213
10	百萬遍知恩寺（京都府京都市左京区）	福持 昌之	218
11	大念佛寺（大阪府大阪市平野区）	奥村 晃代	221
12	常光寺（大阪府八尾市）	出口 実紀	225
13	久米寺（奈良県橿原市）	福持 昌之	229
14	矢田寺（奈良県郡山市）	福持 昌之	233
15	得生寺（和歌山県有田市）	吉村 旭輝	238
16	太山寺（兵庫県神戸市西区）	猪岡 叶英	241
17	大伝寺（鳥取県東伯郡湯梨浜町）	吉村 旭輝	245
18	弘法寺（岡山県瀬戸内市）	福持 昌之	247
19	誕生寺（岡山県久米郡久米南町）	平松 典晃	250
20	阿弥陀寺（山口県大島郡周防大島町）	徳毛 敦洋	255

第四部 調査の概要と体制	259
--------------	-----

例 言

一 本書は、昭和五十一年（一九七六）十二月二十五日付けで国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択された「当麻寺二十五菩薩来迎会」を対象とし、葛城市教育委員会が文化庁の国庫補助事業として平成三十年年度から令和元年度の二ヶ年にわたって実施した「当麻寺二十五菩薩来迎会調査事業」の報告書である。

二 本調査は、文化庁文化財第二課芸能部門及び奈良県地域振興部文化財保存課の指導を受け、浦西勉（奈良県文化財保護審議会委員・元龍谷大学教授）を会長、吉井敏幸（葛城市歴史博物館協議会委員・元天理大学教授）を副会長とする当麻寺二十五菩薩来迎会調査委員会の監修のもとに実施した。

三 「第一部 調査報告」及び「第三部 各地の来迎会（練供養）調査報告」は、当麻寺二十五菩薩来迎会調査委員会の委員及び調査員（以下、調査員等）が担当・執筆した。なお、第三部の来迎会の掲載は、東から西への順とした。

四 「第二部 特論」は、調査委員会委員である阿部泰郎（龍谷大学教授）、船田淳一（金城学院大学教授）、福原敏男（武蔵大学教授）が執筆した。執筆分担については、各報告の末尾に執筆者名を（文責）として記した。

五 本書の編集は、森本仙介（奈良県地域振興部文化財保存課）及び当事業の事務局である吉岡昌信（葛城市教育委員会歴史博物館）がおこなった。また葛城市歴史博物館の勝負由美、神庭滋、渡部弘美の補助を受けた。

七 「当麻」「当麻」の表記の統一については、奈良県葛城市当麻所在の寺院「當麻寺」の名称及びその所在地の地名については「當麻」を使用したが、當麻寺の所蔵する文化財のうち、文化財の指定名称に「当麻」が付くものも「當麻」に統一した。ただし、地名や歴史的用語等において、すでに「当麻」が通用しているものは「当」字を使用した。

八 本書の掲載写真は、報告書作成に伴い調査員等が撮影したもののほか、調査先や関係機関から提供をうけた。

九 調査にあたり、當麻寺奥院・護念院・西南院・中之坊及び菩薩講の皆様のほか、各地で来迎会がおこなわれている寺院やその保存会等の皆様に特段のご協力をいただいた。

第一部 調查報告

第一章 當麻寺練供養会式の概要と総論

1 来迎会（練供養）について

「来迎会」とは、念仏行者の臨終に際して阿弥陀如来が諸仏とともにあの世（極楽浄土）よりこの世（娑婆世界）へ迎えに来て、再びあの世へと導き引きとつて救済するさまを演じる仏教行事である。

平安時代には「迎講」の名が一般的であったが、阿弥陀が「来迎引接」すること（この世に迎えに来て「来迎」、あの世に連れ帰る「引接」こと）から、略して「迎接会」や「迎接之講」「迎撰会」とも呼ばれた。さらに鎌倉時代には「来迎の儀」等とも呼ばれ、江戸時代には「来迎会」、あるいは菩薩等が列を組んで練り歩く所作から「練供養」「踰供養」と呼ぶことが増えた¹。

迎講は、平安中期、天台僧である恵心僧都源信（九四二―一〇一七）が、寛弘二年（一〇〇五）に比叡山の横川に華台院を創建し、僧侶や在家の人々とともに始めた²とされる。

源信は寛和元年（九八五）、死後に極楽浄土へ往生するためには、念仏の実践が最も重要であることを示した『往生要集』を撰述、阿弥陀如来の来迎を受け、死後に極楽浄土へ生まれることを願う浄土教の基礎を確立した。また、寛和二年（九八六）の『二十五三昧式』や永延二年（九八八）の『二十五三昧起請』によると、二十五名の結縁衆を組織し、結社の同志とともに毎月十五日に一夜不断の念仏を修めて阿弥陀の来迎を約し、極楽世界に生まれることを期した。

源信の考案した迎講は、平安中期以降、浄土教の発展と浄土信仰の流布に伴って各地に広まり、盛んに行われるようになった。現在でも全国各地の寺院で二〇例ほどの来迎会・練供養が実施されている。古くは中世の鎌倉・室町期にまで起源が遡れるものもあるが、その多くは江戸時代で、明治以降に始められた

行事もある。中でも鎌倉時代に始修されたと考えられる當麻寺の来迎会は、現在でも「當麻寺聖衆来迎練供養会式」、あるいは「當麻寺二十五菩薩来迎会」と称し、例年盛大に挙行されている。

昭和五十一年（一九七六）年十二月二十五日には国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択されている（選択名称は「當麻寺二十五菩薩来迎会」）。

2 當麻寺聖衆来迎練供養会式（當麻寺二十五菩薩来迎会）の概要

當麻寺は、奈良朝以前に創建された古代寺院で、西方極楽浄土を表した「當麻曼荼羅」とその曼荼羅にまつわる中将姫説話で知られている。

中将姫説話とは、淳仁天皇（在位七五八―七六四）の時代、横領大臣の娘中将姫が継母から逃れて當麻寺に入って修行をしているところ、現れた一人の化人（仏・菩薩が衆生を救うために仮に人の姿になったもの）の助力を得て、蓮糸にて一夜で「當麻曼荼羅」を織る。その後、中将姫は曼荼羅を礼拝し、生きたまま極楽往生を遂げたというものである³。

當麻寺の「聖衆来迎練供養会式」は、中将姫が現身のまま成仏した際、西方の極楽浄土へ向かう様相を再現した野外劇である。

練供養当日は、「當麻曼荼羅」（文亀本）を安置する本堂（曼荼羅堂・極楽堂）から東方にある娑婆堂まで長い架け橋（来迎橋）が渡され、西方浄土の阿弥陀如来から遣わされた二十五菩薩（実際には菩薩二十四、天童二、地藏菩薩・龍樹菩薩各一の二十八）に扮した菩薩講の人たちが、娑婆堂まで来迎し、中将姫の法如化生坐像（中将姫法如が往生した姿）を蓮台に乗せ、再び本堂へ導く儀式で、本堂（曼荼羅堂）は西方極楽浄土を、娑婆堂は六道（俗世界）を象徴している。

當麻寺の練供養は、中世・近世には旧暦の四月十四日（中将姫が極楽往生し

た三月十四日の一ヶ月後とされる）に行われていたが、明治以降は新暦の五月十四日となり、平成三十一年からは四月十四日になった。

午後四時、第一の鐘を合図に、法如坐像（出家した中将姫の坐像）が乗った輿は、護念院（浄土方）の住職、仏花と蠟燭を持った童女二人に先導され、護念院から本堂（曼荼羅堂）へと入る。本堂へ入った輿はそのまま、護念院の住職と童女に先導され、来迎橋を渡って娑婆堂に入る。第二の鐘が鳴らされると、真言方が本堂に上り、内陣で読経法要が営まれる。その後、真言方の僧は本堂の北側に設えられた花庭場に着座する。第三の鐘を合図に浄土方が真言方と入れ替わりに本堂に入り、内陣で法要を行う。第四の鐘が鳴らされると二十五菩薩が護念院から本堂へと入り、行道の準備が整う。

まず浄土方の僧侶の先導で稚児と楽人、そして浄土方の僧が来迎橋を渡る。それにつづき、各介添えを伴った天童二人、菩薩が次々と橋を渡る。最後に介添えを従えない金色の蓮台を持った観音菩薩、合掌する勢至菩薩、介添えを従え、天蓋を持った普賢菩薩が娑婆堂へ向かう。この時、観音菩薩と勢至菩薩は、腰を落として体を左右に振り、手を大きく天に突き出し、ゆっくりと一歩一歩「お練り」と称する所作で前に進み、後に続く普賢菩薩を先導する。

娑婆堂では、護念院の住職によって勤行、来迎和讃が読誦され、法如坐像の像内から金色の小さい法如化生坐像が出され、観音菩薩の蓮台に据えられる。そして、「大乘智慧の手をのべて、行者の頭をなでたまう」と来迎和讃の一節が称えられると、勢至菩薩が法如化生坐像を三度撫でる仕草をする。

娑婆堂での所作を終えた三菩薩は、ほかの菩薩を先導しながら、来迎橋を帰る。帰りの行列は、法如化生坐像を蓮台に据えた観音菩薩が先頭となり、次いで勢至菩薩、そして普賢菩薩。それにつづくのは、三菩薩以外の菩薩や天童、稚児、楽人、浄土方の僧侶。そして、少し遅れて護念院の住職、仏花と蠟燭を持った童女二人に先導された法如坐像の輿がつづく。本堂に入堂し、行事は終

了する。

なお、享祿四年（一五三二）の『當麻寺縁起』（當麻寺所蔵）によれば、かつては来迎印を結んだ木造阿弥陀如来立像が本堂の縁にまで出て、中将姫を迎えることになっていた。

3 本報告書の構成及び内容について

迎講（来迎会・練供養）に関する研究は、美術史・思想史・国文学・民俗学等の分野で盛んに行われてきており、その代表である當麻寺の来迎会（練供養）についても触れられることが多い。

なかでも、戦前、迎講の思想的考察を行うとともに、「来迎芸術」として浄土教美術研究に新たな視点を切り拓いた大串純夫氏⁴、近年では迎講阿弥陀像が実際の法会においてどのような役割を果たしていたかを文献や絵画資料も用いて考察し、これが鎌倉時代の来迎会で考案された彫像であることを論じた關信子氏⁵等、當麻寺の来迎会については、美術史からの研究も盛んである。また、昭和五十年には総合的な調査報告書である『當麻寺来迎会民俗資料緊急調査報告書』（元興寺仏教民俗資料研究所編、国書刊行会、一九七五年）が刊行されている。

本報告書（『當麻寺二十五菩薩来迎会（聖衆来迎練供養会式）調査報告書』）は、基本的には平成三十年度、令和元年度、當麻寺二十五菩薩来迎会調査委員会による調査に基づくもので、「第一部 調査報告」「第二部 特論」「第三部 各地の来迎会（練供養）調査報告」の三部から構成されている。これまでの研究成果を踏まえた上で、行事や組織等の詳細な現状調査を中心に報告したものである。

「第一部 調査報告」は當麻寺来迎会（練供養）の歴史及び現状の調査報告、「第二部 特論」は、迎講（来迎会・練供養）をめぐる考察、「第三部 各地の

来迎会（練供養）調査報告」は、来迎会（練供養）の全国調査である。調査委員会は、民俗学・民俗芸能をはじめ、文献史学・思想史・国文学・音楽史・彫刻史・服飾史等の専門家からなり、當麻寺聖衆来迎練供養会式（當麻寺二十五菩薩来迎会）を多様な視点から総合的に調査したものとなっている。

第一部第二章「當麻寺の歴史と練供養の起源および継承」（吉井敏幸）では、最初に當麻寺の略史を述べた後、残された文献や縁起類の記述から、當麻寺練供養は、平安時代に各地で行われた迎講と、鎌倉時代の當麻曼茶羅縁起、中将姫説話の成立という二つの流れのなかで成立したもので、浄土宗西山派の祖善慧房証空（一一七七～一二四七）が當麻寺を訪れた寛喜元年（一二二九）に始めたのであろうとしている。その後、練供養を引き継いで運営してきた西山派子院の念仏院から、戦国時代に練供養の権利は護念院へ移り、以後、護念院が練供養を主催するようになったとする。

第一部第三章「當麻寺練供養における諸堂の準備と莊嚴」（山本潤）・第四章「練供養会式の行事次第」（福持昌之）・第五章「練供養会式における所作と和讃」（同）は現状の當麻寺練供養の準備と行事次第を詳細に記録したものである。（同）は現状の當麻寺練供養の所作について一四件の図解を掲載し、詳細に記述している。特に第五章では、行道及び娑婆堂での所作について過去の記述を辿るとともに、観音菩薩・勢至菩薩の所作について一四件の図解を掲載し、詳細に記述している。また、各地の「仏舞」や練供養における所作・芸態を比較する試みもなされている。

第一部第六章「菩薩講を構成する各組の歴史と現状」（上田喜江・猪岡叶英）は、行道において菩薩面・天童面を被る菩薩講に属する現行の二十二組（護念院を含む）の現状調査を報告したものである。各組は二名から十名で構成され、講の分布は當麻寺のある葛城市から周辺の香芝市、橿原市など広域に及んでいる。講員は世帯主による世襲制であることが一般的であり、庄屋など、地域に昔から続く家筋によって継承されてきた。なお練供養の中心である護念院は浄

土宗であるが、講員は必ずしも浄土宗であるとは限らない。つぎの第一部第七章「當麻寺と當麻区の年中行事」（吉村旭輝）は、當麻寺の組織と年中行事及び當麻寺が位置する葛城市當麻区の社会組織、年中行事についての報告である。

第一部第八章「練供養における雅楽の歴史と現状」（出口実紀）・第九章「當麻寺来迎会和讃の旋律様式と迎講音楽前史」（田欽智志）は、ともに練供養で読誦され、奏される和讃や雅楽について、音楽史の立場から報告したものである。第八章は現行行事における雅楽の次第や役割、あるいは当日の音楽的要素について報告している。また第九章では、黎明期の迎講においては「讃」の読誦が非常に重要であるとし、現在、娑婆堂で謡われる「来迎和讃」が伝源信作「来迎讃」から詞句を抜粋したものであることを示すとともに、音階構造から判断すると平安後期ないし鎌倉初期の旋律様式と推定されるとする。また菩薩の行道における奏楽と舞についても論は及び、中世の奈良や京の寺院で催された迎講では菩薩役は楽家（舞人）が担い、先導する鶏婁鼓・一ノ鼓の楽人が舞いながら演奏、行道したという。そもそも法会における鶏婁鼓・一ノ鼓の行道の舞は舞楽「菩薩」を組み込んだとされるが、迎講が全国的に波及する過程で、鶏婁鼓・一ノ鼓の行道の舞も迎講の菩薩の所作に取り込まれていったらしい。享祿四年（一五三一）の『當麻寺縁起』所収「脚供養」図でも、観音・勢至・普賢の後に続く鶏婁鼓・一ノ鼓を担当する二菩薩役のみ、上体を前傾させ、腰をおとして「足踏」していることから、現在の観音菩薩・勢至菩薩の所作、芸態にその舞の影響があるのではないかと推測している。

第一部第一〇章「練供養会式における現行の菩薩面・持物・輪光」（吉岡昌信）・第十一章「木造阿弥陀如来立像と木造来迎会所用面」（神田雅章）・第十二章「當麻寺二十五菩薩来迎会の装束」（藤井健三）は練供養で菩薩が使用する面や持物、衣装等の用具についての調査報告である。第一〇章は現在用いられている現行の用具についての解説、第十一章は、来迎会の本尊であった阿弥陀如来立像と

各地の練供養一覧

	寺院名（所在地）	主たる宗派	開催日
	當麻寺（奈良県葛城市）	浄土宗・真言宗	5月14日（毎年）
1	浄真寺（東京都世田谷区）	浄土宗	5月5日（3年毎）
2	十念寺（長野県小諸市）	時宗	不定期
3	蓮華寺（愛知県あま市）	真言宗	4月第3日曜（毎年）
4	地藏堂（愛知県愛西市）	真言宗	17年毎
5	西蓮寺（三重県伊賀市）	天台宗	4月第3日曜（毎年）
6	新善光寺（滋賀県栗東市）	浄土宗	不定期
7	阿弥陀寺（滋賀県栗東市）	浄土宗	不定期
8	光明寺（京都府長岡京市）	浄土宗（西山浄土宗）	4月（毎年）
9	即成院（京都府京都市東山区）	真言宗	10月第2日曜（毎年）
10	百萬遍知恩寺（京都府京都市左京区）	浄土宗	4月25日（3年毎）
11	大念佛寺（大阪府大阪市平野区）	融通念仏宗	5月1～5日（毎年）
12	常光寺（大阪府八尾市）	臨済宗	4月最終日曜（毎年）
13	久米寺（奈良県橿原市）	真言宗	5月3日（毎年）
14	矢田寺（奈良県大和郡山市）	真言宗	中止（平成7年まで）
15	得生寺（和歌山県有田市）	浄土宗（西山浄土宗）	5月14日（毎年）
16	太山寺（兵庫県神戸市西区）	天台宗	5月12日（毎年）
17	大伝寺（鳥取県東伯郡湯梨浜町）	曹洞宗	旧暦3月14～15日（毎年）
18	弘法寺（岡山県瀬戸内市）	真言宗	5月5日（毎年）
19	誕生寺（岡山県久米郡久米南町）	浄土宗	4月第3日曜（毎年）
20	阿弥陀寺（山口県大島郡周防大島町）	浄土宗	4月27日（毎年）

平成十六年まで用いられていた来迎会所用面についての調査報告である⁶。本堂須弥壇上に安置される木造阿弥陀如来立像一軀は、像内に人が入る特殊な構造につくられた来迎会の本尊である。同様の構造を備えた迎講阿弥陀像は、本像のほかに米山寺（広島県）、弘法寺（岡山県）、誕生寺（岡山県）、大念佛寺（大

阪府）の四例が知られている。本像の制作年代は鎌倉中期を遡るものではないが、それらの中でも年代が古い。また木造来迎会所用面二十八面（菩薩面二十四面、僧形面二面、天童面二面）は、鎌倉時代が四面、南北朝から室町時代が二十面、江戸時代が四面と推定される。特に昭和五十八年の保存修理の際に、六号面（面部は室町時代）の髻内割り面に建保三年（一二二五）に範忠が作った旨を記す墨書銘が確認された。當麻寺における迎講の始まりと本像の造立を、証空によって当寺が復興される仁治三年（一二四一）から寛元三年（一二四五）頃に求める説が有力であるが、本像についてはさらに降る可能性も考えられるという。

第一部第一章は、護念院が保管する二十五菩薩来迎会装束（行事当日に着る現用装束類一式と現用装束類が新調される以前に使われていた旧用装束類一式）の種類、製作経緯、形態、仕様（織物特徴）、銘文、着装次第等についての調査報告と記録である。旧用装束類は江戸時代中期後半から後期にかけて調整されたもので、平成初頭まで長年に亘って使い続けられてきた。また現用装束は古くなった旧用装束に替えて平成四年頃から順次新調された装束類である。旧用装束は仏事用の法衣錦織や金襴織の別誂えで高価な装束を用いた仕様であり、現用装束は明治から昭和戦前の婚礼用丸帯織物が利用されており、既に得られなくなった格調ある古の高級織物を収集したものという。

第二部第一章「平安期浄土教儀礼の世界」（船田淳二）は、浄土信仰を具現する儀礼を「浄土教儀礼」という概念で把握し、円仁から源信を経て、叡山浄土教における「観仏」の実践と、そこで感得される「見仏」という神秘的宗教体験への希求を精神史的基盤として、日本における浄土教儀礼の最大の芸術的精華である来迎会が生成する過程を宗教テキストの読解を通じて跡付ようとした論考である。一方、第二章「迎講を創り営む聖人たち」（阿部泰郎）は、迎講をめぐる人々が語り伝えた説話から、迎講という宗教儀礼の特異な性格の

本質に迫るとともに、儀礼が社会に与えたインパクトや文化的記憶、それを通して形成された心性や世界像に接近しようとしたものである。また第三章「大坂梅田練供養図のこと」(福原敏男)は、希少な近世の肉筆絵の練供養図である「梅田ねりくやう」図(大阪府立中之島図書館蔵『幕末維新絵物語 巻一』収載)についての紹介である。

第三部は、當麻寺を除く、現行の来迎会(練供養)の全国調査である。過去の調査報告⁷に掲載されている一覧表等より現行(不定期も含む)の行事を選んで、現地調査を実施したものである。ただし、矢田寺(奈良県)は平成七年で休止しているため、現行一九件、休止一件の詳細調査となっている。

現行の一九件(當麻寺を除く)を宗派別に見ると、浄土宗が八件と最も多く、次いで真言宗の五件、天台宗が二件で、残りは時宗、融通念仏宗、臨済宗、曹洞宗が各一件である。開催日は四月、五月がほとんどである。起源については、弘法寺(岡山県)のように當麻寺と同じく鎌倉時代に始められたと考えられる行事もあり、室町期に當麻寺に倣って来迎会を始めたと伝える大念佛寺(大阪府)、中将姫が主役となった得生寺(和歌山県)や大伝寺(鳥取県)の例もある。また菩薩が所作を行う例は當麻寺以外では、十念寺(長野県)、即成院(京都府)、大念佛寺(大阪府)、久米寺(奈良県)、弘法寺(岡山県)で確認できるが、弘法寺(岡山県)の場合には来迎引接の所作のみで、行道中の所作はない。

以上のように當麻寺は現行の来迎会の中で最も長い歴史を持つとともに、古い形式をよく残している。本報告書の刊行により今後、この分野の研究が更に進展することを願いたい。

1 關信子「『迎講阿弥陀像』考I—當麻寺の来迎会と弘法寺の迎講阿弥陀像—」『仏教芸術』二二二(仏教芸術学会編、毎日新聞社、一九九五年)、同「迎講・来迎会・ねり供養—主役の迎講阿弥陀像を中心に—」(『特別展図録 極楽へのいざない—練り供養をめぐる美術—』、龍谷大学龍谷ミュージアム・毎日新聞社・京都新聞社編刊、

二〇一三年)等を参照

2 本報告書第二部第一章参照

3 中将姫説話については、『中将姫説話の調査研究報告書』(元興寺文化財研究所、一九八三年)等を参照

4 大串純夫「来迎芸術論」(一九四〇/四一年)(同『来迎芸術』、法蔵館、一九八三年)

5 關信子「迎講阿弥陀像考I~V」(『仏教芸術』二二二~二二八号、一九九五~九六年)

6 木造阿弥陀如来立像一軀は平成十年三月二十日付けで奈良県指定有形文化財となっている。一方、護念院が保管する木造来迎会所用面二十八面は、平成十六年まで練供養で実際に用いられ続けてきたもので、平成二十九年二月十四日付けで同じく奈良県指定有形文化財となった。

7 『當麻寺来迎会民俗資料緊急調査報告書』(元興寺仏教民俗資料研究所、一九七五年)、關信子「『迎講阿弥陀像』考I—當麻寺の来迎会と弘法寺の迎講阿弥陀像—」『仏教芸術』二二二(仏教芸術学会編、毎日新聞社、一九九五年)、『特別展 極楽へのいざない—練り供養をめぐる美術—』(龍谷大学龍谷ミュージアム・毎日新聞社・京都新聞社編刊、二〇一三年)、入江宣子・福原敏男「二十五菩薩練供養」(『京都の民俗芸能—東京都民俗芸能調査報告書—』(東京都教育庁地域教育支援部管理課編、東京都教育庁地域教育支援部管理課、二〇一二年)による。

(森本仙介)

第二章 當麻寺の歴史と練供養の起源および継承

1 はじめに

當麻曼荼羅で著名な當麻寺では、毎年四月十四日に當麻寺練供養（米迎会）が行われている¹。これは平安時代に恵心僧都がはじめたとされる迎講むかえこうを起源とする、西方浄土の阿弥陀から遣わされた二十五菩薩の来迎を実演する行事で、現在も全国各地で行われている²。各地の練供養は二十五菩薩の来迎という意味では共通するが、誰が来迎を受けるかなど、細部で異なる。當麻寺の場合は、當麻寺本堂厨子に安置されている西方浄土の姿を表した當麻曼荼羅を、中将姫という女性の願いにより、化人が蓮糸に一夜にして織り上げ、それにより中将姫が極樂往生を遂げたという説話を練供養にて実演するという形式をとっている。本稿では、まず最初に當麻寺の略史を、そのあと當麻寺練供養がいつ頃成立したのか、それはどのような形で継承されていたのか、について文献史料から私見を述べたい。

2 當麻寺の歴史

（1）當麻寺の創建

當麻寺は、奈良朝以前に創建されたこの地域の古代豪族當麻氏の氏寺である。伽藍は南向きで東西の三重塔、金堂、講堂が縦に並ぶ典型的な古代地方寺院であった。ところが金堂の西南側に東向きの曼荼羅堂（本堂）があり、奈良時代末には本尊極樂浄土曼荼羅である當麻曼荼羅が安置されていた。しかし寺には創建時の史料がなく、寺外の創建史料も鎌倉時代初期の「建久御巡礼記」をはじめとする種々の縁起類の成立まで待たねばならない。

各種の縁起類によると、當麻寺は白鳳時代の天武天皇即位九年（六八二）に、當麻真人国見により創建され、禪林寺とも呼ばれた。その前身寺院が、當麻寺

より南五、六町にあった万法藏院で、礎石が今も残るといい、用明天皇皇子で當麻氏の祖である万呂子親王の發願で建立された。この当初の寺院が現在地に移ったのは、この地が役行者の練行の地であるからである³。當麻寺が奈良時代前期には既に創建されていたことは、境内からの出土瓦や釣鐘、金堂前の石灯籠、金堂の塑像本尊弥勒仏坐像、曼荼羅堂の前身堂などいずれもこの時代のものであることからいえる。東西の三重塔や當麻曼荼羅も奈良時代末とされている。

當麻寺が古代の氏寺から出発したが、當麻曼荼羅の存在とそれにまつわる中将姫説話が寺の歴史を大きく変え、當麻寺が創建以来今日まで存続発展した要因となった。

中将姫説話とは淳仁天皇（在位七五八―七六四）の代に、横佩大臣よこはきのおとど（藤原豊成に比定されている）の娘中将姫が継母から逃れて當麻寺に入って修行をしていたところ、一人の化人が現れ、集めた蓮糸にて一夜に曼荼羅を織る。その後中将姫は曼荼羅を礼拝し、極樂往生を遂げる。細部は縁起や説話により異なるがだいたい以上のような内容である。

當麻寺は今日では真言宗と浄土宗の共存の寺院であるが、平安時代前期から江戸時代の初め頃までは真言宗寺院であった。當麻寺真言方の當麻寺創建伝承は、開山役行者、開基天武天皇、本尊は元は千手観音であるが、後に曼荼羅が本尊となったという⁴。中将姫が當麻寺に入山した時は一山三論宗で、中将姫は中之坊の第一代実雅の弟子であった。弘仁十四年（八二三）秋に勅命により弘法大師が當麻寺で参籠し、一七日の間曼荼羅秘観に入り、中之坊実弁はこれにより大師の弟子となり、一山が真言宗となった⁵。弘法大師の當麻寺来山については「弘法大師年譜」第八に、弘仁十四年八月、空海が當麻寺に参じて曼荼羅を拝した、とある。

當麻寺真言方は、曼荼羅信仰よりもむしろ山岳信仰である葛城修験、二上山

修験が信仰の中心であり、これは當麻曼荼羅の阿弥陀信仰や浄土信仰に比べて目立たないが、山の信仰は當麻寺周辺村落の「ダケノボリ」という習俗で根強い信仰を今日まで残している。⁷

(2) 平安時代の當麻寺

一般の古代地方豪族の氏寺は、寺を支える地方豪族の勢力衰退と変質により九世紀から一〇世紀には衰退に向かい、その多くは廃寺となっている。當麻寺周辺の加守廃寺や尼寺廃寺などがそうであるが、當麻氏の氏寺であった當麻寺は平安時代になっても衰退したという雰囲気はない。當麻氏が様々な形で在地に根をおろしていたからかもしれないが、他方では次第に高まっていた浄土教の発展による曼荼羅の信仰によると見られる。それゆえ當麻寺の伽藍は南向きから東向きに変わり、曼荼羅堂が名実とも本堂となった。

平安時代には、寺院に対する古代の律令制による古代国家の保護や寺田制度が衰退し、荘園制が発展して自らの力で所領を確保しなければならなくなった。他方大和国では興福寺が大和国全体を支配し始めたが、當麻寺も興福寺の末寺となった。所領は當麻寺周辺の當麻庄や平田庄などに寺領があったが、興福寺領の一部として興福寺の支配の枠内での寺領であった（これは東大寺と多武峰を除く大和国諸寺社領はいずれも同じ）。

浄土信仰が盛んになるにつれて、當麻曼荼羅が注目され、都でも當麻寺の存在が認められ行者や参詣者が訪れるようになった。平安時代中期になると、浄土信仰を進めた天台宗の恵心僧都源信（一〇一七）は當麻寺の近くの良福寺の出身でもあり、當麻寺周辺は浄土教の聖地となっていたものと思われる。

曼荼羅堂の前身堂は奈良末、平安初期には改修され、組物や幕股などで飾られ、屋根も切妻造から寄棟造に改められた。曼荼羅を納める六角宮殿もこの時造られた。

永久二年（一一一四）十月十五日、當麻寺で大般若經一日書写があり、永曆

二年（一一六一）には曼荼羅堂が改修されて上棟が行われた。この時は堂の主屋の部分を内陣とし、前方の庇の部分を拡張して外陣（礼堂）とし、内外両陣を覆う一つの屋根をつくり、正面七間側面六間、寄棟造りの堂となった。¹⁰ 仁安三年（一一六八）には大勧進禪林寺住侶等が堂建設を行った。¹¹

當麻寺の平安末の事件として、平家の當麻寺焼き討ちがある。

治承四年（一一八〇）十二月、平重衡による南都焼打で東大寺・興福寺は焼失したが、當麻寺も河内から来た平家方の越中次郎守次の軍勢が當麻寺に乱入した。諸堂が焼けたが曼荼羅堂だけは難を逃れたと「一遍聖絵」に記載されている。¹² 金堂の野棟木に「治承四年歲次庚子依平家乱」の墨書があったというので事実である。ただし東西両三重塔は焼けていない。¹³

(3) 鎌倉時代の當麻寺

古い文献の関係史料の無かった當麻寺は、鎌倉時代になると、寺外で當麻寺や中将姫説話、當麻曼荼羅信仰に関する文献が出てきて、當麻寺が世間で認められてきたことがわかる。その最初は「建久御順礼記」（一一九一年）であるが、それに類する文献は約一〇種類に及ぶ。¹⁴ ちょうど鎌倉時代に入った頃に當麻曼荼羅や中将姫説話が世間に広く知られるようになった。

格段に有名になったのは、法然の高弟で浄土宗西山派開祖の証空の當麻寺訪問である。証空の著した「當麻曼陀羅注」¹⁶によると、當麻寺の老僧見阿の勧めにより建暦二年（一二二二）に弟子二五人を引き連れて當麻寺に参詣し、曼荼羅が唐僧善導の觀經の文義に従っていることに感激し、曼荼羅を写し取り各地に流布させた。後述するように當麻寺練供養は彼が始めたと考えられる。

建保三年（一二二五）には原寸大の根本曼荼羅が模写されている。仁治三年（一二四二）には曼荼羅の厨子の周囲に板扉が新設され、將軍藤原頼經以下二五〇人の結縁交名が記された。文永五年（一二六八）には大勧進良觀房によって曼荼羅堂の屋根の修理、弘安六年（一二八三）には龜山上皇らが當麻寺参詣、

弘安八年には西山派の僧樂生が念仏院を創建、弘安九年（一二八六）には一遍上人が當麻寺参詣、乾元二年（一三〇三）には平家焼討で焼失した講堂が、正中三年（一三二六）に金堂が上棟している。

以上のように鎌倉時代は當麻寺にとって曼陀羅信仰や中将姫説話の流布、伽藍修理など大いに発展した時代であった。

（4）南北朝～戦国時代の當麻寺

中世後半期とも言われる南北朝から戦国時代も、當麻曼荼羅をめぐる浄土信仰がますます盛んになり、前時代から引き続き浄土系勢力による寺内周辺への進出が進んだ。そのもつとも象徴的な出来事が、応安三年（一三七〇）に知恩院派が當麻寺内に往生院を建立し、宗祖「法然像」（鎌倉末）、「法然上人行状絵巻」（鎌倉時代）、「選択本願念仏集」（鎌倉）など知恩院の宝物を往生院に移した¹⁷ことである。これにより知恩院派浄土宗は當麻寺で勢力が大きくなっていった。

建物の修理では、曼荼羅堂は室町中期に大規模な修理を行ったが、それに前後して康永四年（一三四五）に曼荼羅堂の屋根の葺替、享徳二年（一四五三）曼陀羅堂の厨子や瑠璃壇の金物や彩色で勸進聖善阿の活躍、大永八年（一五二八）曼陀羅堂の屋根瓦葺替、天文十七年（一五四八）曼荼羅堂厨子扉内の格子修造など、次々に進められた。

これらの修理などは曼荼羅堂の右前にある、勸進聖が集まる「本願所」を中心に進められた。文亀三年（一五〇三）には文亀本當麻曼荼羅が模写されたが、その軸木銘の立筆の観阿弥陀仏は「当寺居住客僧道心堅固之僧也」とあり、勸進聖の念仏僧であった。天正十一年（一五八三）から十二年にも當麻寺では大規模な修理が行われているが、天正十三年六月二日「正親町天皇綸旨」に「工匠廻廻斧斤之旨所被聞食也、弥以沙門之勸進専成土木之経営」とあり、戦国末で寺院経営が困難であったはずだが、當麻寺では堂舎の修理が進められていた。

當麻寺に集まる勸進聖の活動の故である。

（5）江戸時代の當麻寺

文禄四年（一五九五）九月二十一日、豊臣秀吉より當麻寺に広瀬郡大塚村のうち三〇〇石の朱印領が与えられ、徳川幕府もそれを引き継いだ。

中世以来當麻寺は真言宗寺院で、真言方の子院が寺院全体を支配していた。しかし他方では浄土系の子院も多数創建され、寺内や周辺には勸進聖や道心、客僧、俗人が居住していた。¹⁹慶長十四年（一六〇九）八月、真言宗と浄土宗の寺内の支配に拘わる相論で、幕府裁許状が出され、形の上では両宗は対等となった。²⁰

江戸時代の當麻寺内の子院は、「庁中漫録」（後述）によると真言宗は一九ヶ院、浄土宗は三ヶ院だがそれぞれの子院に末寺があり、全部で一九ヶ院である。

真言宗十五箇院

学侶方（右座） 西南院、不動院、北室院、千手院、中之坊、明王院、東

南院、松室院、弥勒院、地藏院、竹之坊、

行人方（左座） 西室院、新坊、弘法大師御供所

浄土宗三箇院

奥之院 寺家末寺 善願院、西雲院、長寿院、順正庵、西照軒、宗胤院

護念院 寺家末寺 引接院、福知院、畑之庵、浄雲庵、東室院、徳林庵

念仏院 寺家末寺 松樹院、来迎院、紫雲庵、諦知軒、桂林庵、池之坊、

心楽庵

當麻寺内の年中行事は真言方と浄土方はそれぞれで行事法会を行い、全山で行った法会は毎年四月十四日に行われた練供養のみであった。参考のために次頁に真言、浄土それぞれの法会年中行事の一覧を掲載する。

当麻寺真言宗学侶行人年中行事

行 事 名	日 時	担 当 者	備 考
金堂修正会	正月元日～17日	衆徒・行人	天下太平五穀豊饒
本堂妙音講	正月元日～三日	学侶	伽陀管弦等
講堂最勝講	正月9日～17日、2時	衆徒・行人	
薬師堂行	正月8日	衆徒・行人	
仁王門之行	正月8日	衆徒・行人	仁王講四箇法用
天神宝前之行	正月8日	衆徒・行人	諸神勸請
本堂行	正月8日	衆徒・行人	
仁王講	正月15日	衆徒・行人	熊野権現・一言主前
山籠	毎朝後夜	学侶行人廻り役	本堂
往生講	毎月六斎日	学侶	本堂
大師堂	毎日	御供所別	天下代々位牌前
同堂	毎月21日	衆徒・行人	御影供法事
法華堂	毎日	学侶・行人	
北之念仏	毎日	学侶	本堂
金堂修二会	2月1日～17日	衆徒・行人	
八幡講	2月3日	学侶	
四座講	2月15日	学侶	本堂
涅槃会	2月15日	学侶・行人	法花堂
春彼岸会		学侶	
秋彼岸会		学侶・行人	天下代々位牌前
不断経	3月14日～20日	学侶	本堂
役行者講	2月17日・6月7日	学侶の内葛城先達	金堂
地藏講	1月6月11月の各24日	行人	講堂
跏供養	4月14日	学侶	本堂
竜王講	6月1日	学侶・行人	
蓮華会	6月23日2時	学侶・行人	本堂
鎮守五社勤行	7月8日から3日	学侶・行人	
法花堂法事	7月11日から3日3夜	学侶・行人	
大阿弥陀経	7月4日	学侶・行人	
曼荼羅講	毎月23日卯ノ刻	学侶	本堂
壇場勤行	毎月21日	衆徒	本堂
舍利講	4月8日～結夏	学侶	本堂
長日護摩供		惣中	

「中之坊文書」延宝8年9月21日「和州当麻寺真言宗学侶行人年中行事」

当麻寺浄土宗法事

行 事 名	日 時	備 考
迎接会	4月14日	二十五菩薩来迎、護念院支配の寺役
誦経念仏	毎日初夜晨朝	於曼荼羅堂、各番で行う
仏餉供	毎朝	曼荼羅前で仏餉備え念仏、護念院寺役
修正月元三法事	正月	曼荼羅前、衆僧出仕、三部経読誦
大施餓鬼	7月15日	曼荼羅前
礼讃勤行	毎月15日	衆僧出仕
結夏御勤	毎日	衆僧出仕
彼岸勤	春秋二季	衆僧出仕
報謝勤	毎月14日	曼荼羅堂、中将法女喜謝別時念仏
法然御忌会	正月19～25日	
涅槃会	2月15日	
善導会	3月8～14日	
十夜会	10月6～15日	
正月三ヶ日法会		末寺比丘尼法事
結夏之勤行		末寺比丘尼法事
二季彼岸勤行		末寺比丘尼法事
誦経念仏		末寺比丘尼法事、曼荼羅堂南道場、毎日

「中之坊文書」延宝8年9月21日「当麻寺浄土宗法事之覚」

3 當麻寺練供養の起源のこれまでの研究史

當麻寺練供養の成立に関するこれまでの研究では、柴田実氏、伊藤唯真氏が最初である。²¹

柴田実氏は、当寺には来迎会（練供養）に関する初伝はない、として中近世の寺外の記録類から分析されている。まず迎講は確かに平安時代に文献上出てくるし、源信から始まったが、これは當麻寺の来迎会には結びつかない。当時の迎講は来迎引接を主とするものであり、二十五菩薩と名付けられるほどに多数の聖衆や天人の随従はなかったので、今日の當麻寺来迎会の起こりとはいえない。中将姫伝説も広く知られるのは鎌倉時代であり、中将姫伝説が唱道説教を通じて當麻曼荼羅への結縁と念仏・勧進の行われるようになるのは、さらに下って室町時代である。すなわち来迎会は室町時代以降、念仏信仰の一層弘通する時勢にあつて、それをさらに勧進すべく当寺の僧達によって始められたと考えられる。今日曼荼羅堂にある文亀曼荼羅の掲げられた頃ではないか、とされている。

また伊藤唯真氏も、當麻寺の来迎会は十一世紀以降に盛んに催された迎講に、思想的にも儀礼的にも脈絡を有している。迎講の最初は源信が祖。また来迎図とも関係し、来迎図を動的に立体化したのが迎講であり、来迎絵も源信と関係があつた。源信は本願に拠る臨終迎接の教説に基づいて、来迎往生とそのために行儀に焦点を置きつつ、迎接を説いている。迎講の思想的根拠もここにある。ただし、迎接に出てくる弥陀・聖衆などについて、二十五菩薩の名前が出てくるのは源信より後世である。はつきりと二十五菩薩来迎の思想が出てくるのは、南北朝期である、とされている。

岩城隆利氏の説は、²² 當麻寺に鎌倉時代の菩薩面があることから、鎌倉時代にはすでに迎講は行われていたが、他の寺院と同じようなものであつた。ところが享祿四年（一五三一）に宗胤の本願で「當麻寺縁起」が出来たことで旧来の

迎講は一新して二十五菩薩に引接される主体は、中将姫となった。

以後、當麻寺練供養の起源については室町起源説が認められてきたが、²³ 関信子氏は練供養で使用された仏像や行道面がすでに鎌倉時代に存在していたことから、當麻寺を含む練供養は鎌倉時代には成立していた、とされた。²⁴

氏は、當麻寺曼荼羅堂に安置されている阿弥陀如来立像は、以前は練供養に使用された像であり、いわば練供養の主役である。その阿弥陀像は室町時代の「當麻寺縁起」の絵巻に来迎橋の行列が戻る時に曼荼羅堂の縁先に出てくる阿弥陀像であり、これを「迎講阿弥陀如来」と呼ぶ。その像の胎内には人間が入ることができる構造になっており、練供養の時に人間がはいったという。この阿弥陀如来立像は現在の練供養では使用されていない。

このような「迎講阿弥陀」は、岡山県の弘法寺、兵庫県の浄土寺、広島県の米山寺、岡山県津山市の誕生寺等にも見られ、いずれも鎌倉時代のものである。つまりこのような形式の練供養は鎌倉時代に成立したといえる、とされた。

さらにこれらの練供養（迎講、来迎会）を行っていた寺院には、同時に使用する行道面があるが、當麻寺の行道面は二八面のうち四面は鎌倉時代のものであり、弘法寺の一〇面の行道面も鎌倉時代の面を模して造られており、米山寺の天童面、菩薩面、行道面は鎌倉時代末のものである、という。

以上から氏は各地の練供養は鎌倉時代から始まったとされており、特に當麻寺練供養は、寛喜元年（一二二九）に當麻寺に参詣し曼荼羅を見て感激した証空が始めたと考えている、とされている。²⁴

私も當麻寺練供養がいつ始めたのか、様々に検討したが、関信子氏と同じように鎌倉時代に浄土宗西山派の祖善慧房証空（一一七七～一二四七）が始めたのではないか、証空の後は當麻寺内に西山派の拠点が形成され、それが練供養を奉行し続けたのではないかと考えるに至った。特に當麻寺練供養では、當麻寺護念院が中心的役割を果たしている点を注目して、以下當麻寺内外の練供

養に関するいくつかの文献資料から改めてその起源とその継承を検討したい。

4 江戸時代の練供養の特徴

(1) 護念院が差配する練供養

現在、當麻寺練供養は、當麻寺全体の年中行事であるが、事実上は護念院が準備をし、護念院は練供養を支える菩薩講を組織している。護念院以外の各子院は準備段階では殆ど関与しない。これと同じことが近世の練供養の場合も言える。

近世の練供養は當麻寺全体の重要な行事であるが、真言宗と浄土宗ではその重要性は異なっていた。

「中之坊文書」延宝八年（一六八〇）九月二十一日「和州當麻寺真言宗学侶行人年中行事」は、當麻寺真言宗方の年中行事を書き上げたものである。

和州當麻寺真言宗学侶行人年中行事

一、金堂修正会

（中略）

一、役行者講

一、地藏講

一、跏供養 本堂四月十四日 学侶

一、竜王講

（中略）

坊舎十二ヶ院 学侶方

二ヶ院 行人方

御位牌前 御供所

延宝八庚申曆九月廿一日 當麻寺

真言中（傍線筆者、以下同）

これによると真言宗方では正月の金堂修正会からはじまり、本堂妙音講、講堂最勝講などが続き、最終は長日護摩供まで全部で三三の行事がある。その中に二四番目に「一、跏供養 本堂四月十四日 学侶」とあり、四月十四日に練供養を行うが、これは学侶のみの参加であるという。しかし特に重要な行事であるという書き方ではなく、多くの行事の一つ、といった書き方である。

これに対して、「中之坊文書」延宝八年九月二十一日「當麻寺浄土宗法事之覚」は浄土宗方全体で執り行う法要の書き上げであるが、一七箇の法事が書かれているうちに、特別な行事として、ほかの法事とは別に冒頭に迎接会（練供養）が書かれている。

當麻寺浄土宗法事之覚

毎年四月十四日跏供養之法事廿五菩薩

一、迎接会 来迎之鉢中将法女迎接之様子執行仕候御事、

但是者護念院支配寺役二而御座候、

勤行之事

一、於曼陀羅堂 毎月初夜晨朝各番二致出仕誦經念仏

（中略）

一、曼陀羅堂於南道場毎日誦經念仏相勤

右浄土宗法事勤行之次第如此

本坊院数三軒

奥院

念仏院

護念院

末寺之坊舎

十八軒

延宝八年九月廿一日

當麻寺浄土中

これによると、浄土宗方では練供養は特別な法事であり、二十五菩薩が中将姫を迎える姿を見せたものである、と具体的に記し、さらにこの法事は浄土宗の子院である護念院が執り行う法事である、としている。

以上のように、練供養は真言宗では多くの行事の一つであり、特に重要なものではない。また参加の内容も、「四月十四日式伽陀管弦学侶中勤之、莊嚴頭学侶経栄之」とあり、真言方は、伽陀管弦、つまり音楽と莊嚴を行っていた。

この練供養は當麻寺全体、または浄土宗全体が準備をし行事を執り行うわけではなく、浄土方の護念院が練供養の準備その他執行を行っている。

「中之坊文書」享保九年（一七二四）七月二十七日「乍恐以書付御願申上候」
「中之坊文書」享保九年「享保九辰争論之控」所収）は、真言宗と浄土宗の間で享保七年（一七二二）から九年まで行われた曼荼羅堂、金堂、講堂などの修復、仏像の再興での修復供養をめぐり、これらは本来浄土方が関与しないものであると真言方が南都奉行所に訴訟した一件での訴訟文書の一部である。これは浄土方から出された文書であるが、そこにこのような一文がある。

乍恐以書付御願申上候

（中略）

一、当年中将法如尼公九百五拾年忌二付（中略）跣供養之道具二十五

菩薩之面装束一山之什物二而候得共前々より護念院二

預り被来候故、

（中略）

一、護念院二有之二十五菩薩之面装束之義一山之什物

共護念院什物共難極候、跣供養ハ一山不闕之法事二而

御座候得共是護念院請込之法事二而毎年四月十一日二

浄土宗僧中を護念院え呼請齋仕候、真言方之

僧中并比丘尼中え者齋料米を差遣シ申候、面装束損シ

申候節も寺中より差構不申護念院自分二修理仕候、然二

是を例二引被申候段不都合二奉存候御事、

享保九年は中将姫の九五〇年忌にあたっており、練供養の道具である二十五菩薩の面、装束などは當麻寺全体の什物であるが、以前から護念院が預かっている。この什物は実は一山のものか護念院のものか分からないけれども、護念院の「請込」、つまり法会すべてを引きうけている法事であって、毎年練供養を行う四月十四日の二日前の四月十二日に、浄土宗の僧侶は護念院に集まり「齋」、つまり法要のための食事をとる、真言方の僧中や比丘尼などには護念院から「齋」料米、つまり食料として米を送ることになっていた。さらに面や装束が損じた時は、當麻寺全体は関与せず護念院が自分で修理することになっていた。

（二）菩薩講

近世の練供養でもう一つ重要な点は、練供養の実演者が周辺村落の住民であることである。練供養を維持する組織として菩薩講がある。今日では一六の講があり、練供養を支えている。『當麻寺来迎会民俗資料緊急調査報告書』によると、

當麻町（現、葛城市）

當麻組、染野組、今在家北組、今在家南組、勝根組、木戸組、竹之内

組

新庄町（現、葛城市）

正田組、西辻組、忍海組

香芝町（現、香芝市）

五位堂組、磯壁組、狐井組、畑組

橿原市

観音寺組、田中組

當麻寺塔中

中之坊組

信者で組織（主に大阪）

細田組

大和高田市

南郷組（すでに解散した）

以前講に入っていた組

長尾、太田、今倉、北角、瓦口、別所、野口、磯野

これらの組の起源は少なくとも江戸時代に遡ることができる。それぞれの菩薩講が持っている合計二八枚の「札」のうち、最も古いものは元禄六年（一六九三）のものが三枚あり、少なくとも元禄年間には菩薩講が成立していた。この菩薩講がどのような形で成立したのか、が課題だが、今のところ不明である。この菩薩講と當麻寺真言方が組織している二上山へのダケマイリの村々とその講組織とは全く異なる。「中之坊文書」嘉永二年「二上山本社造営入用決算表」に當麻寺鎮守社二上神社本社造営負担の村組名が中筋村九ヶ村、磯壁組一二ヶ村、良福寺組一〇ヶ村、長尾組一二ヶ村、瓦口組四ヶ村、鎌田組四ヶ村、王寺組二ヶ村、穴虫組二ヶ村、有井組二ヶ村、高田組四ヶ村、曾根組二ヶ村、道穂組七ヶ村、太田組二ヶ村、笛堂組四ヶ村、當麻組二ヶ村、竹之内組二ヶ村の計八〇ヶ村を組織していた。

（3）護念院以外の當麻寺子院の練供養とのかかわり

現在の練供養では真言僧は諸菩薩の練りの前に曼荼羅堂での読経法要をし、「阿弥陀大呪」をあげ、曼荼羅堂縁側に設けられた花庭場で三礼、洒水、伽陀

の法要を営む。²⁵これについては「中之坊文書」享保十二年（一七二七）「曼陀羅堂其外諸伽藍年中行事並各院靈宝末寺帳」に

一、跣供養

四月十四日式伽陀管弦学侶中勤之

大導師一臈法印

とあり、練供養では真言宗僧侶は学侶が「伽陀管弦」つまり音楽を勤める、この時の大導師は一臈法印である、としている。したがって真言僧は練供養の中心である菩薩の行道には関与していない。これは今日も江戸時代も同じである。

當麻寺浄土宗の中心子院である奥院の練供養参加状況については、「奥院文書」嘉永二年（一八四九）四月「跣供養日鑑」に記載がある。これによるとこの年の練供養法要では本寺奥院から出勤の達書が来た。この年は四月十四日二ヶ寺、同月十五日二ヶ寺の末寺が隨身をもって出勤する。そのときは香衣（色衣）と五条袈裟で四つ時（午前一〇時頃）に登山する。この年は十四日は末寺の専称寺・西方寺・如法寺・常光院、十五日は常楽寺・福応寺が出勤している。十四日は早朝から入浴、四つ時に参詣人に本堂にて縁起説き。一番太鼓が鳴ると着衣、一番太鐘で真言僧が出勤。二番鐘で方丈から出て先払二人、待士一人、同二人と行列をつくる。そこに笠一人、御乗輿一人、陸尺四人、長柄一人、曲衆一人、草履取一人、惣棹一人が行列をつくる。奥院庫裏玄関から乗輿を中心に本堂後手の控まで行き、本堂で法事。そこから来迎橋を渡って娑婆堂へ行き、法如（中将姫）御前で焼香、娑婆堂の後ろで曲録に着座。読経の後に和讃を唱える。菩薩が本堂へ帰った後に順次引き取り、本堂にて双盤念仏して内陣へ入り、立座して山主高声にて十念して退去する。もし十四日が雨天ならば本堂外陣の北方を娑婆堂とし、菩薩の練りは縁側で行う。

以上の場合、浄土宗奥院の練供養参加状況だが、十四日は末寺のうち四ヶ寺、十五日は二ヶ寺が参加している。本堂での法事と娑婆堂での法事があり、菩薩練りに連なって行列する。このように奥院は練供養の行道には僧侶として参加はしているが、菩薩面を被った菩薩の練りなどには何ら関与していない。これらは今日とそれほど違わない。

5 諸縁起にみる當麻寺練供養

ここでは様々な當麻寺縁起や中将姫説話、練供養縁起などから、練供養の縁起を見てみたい。

享祿四年（一五三一）四月十一日「當麻寺縁起（享祿本）」²⁶には次のように記されている。

（前略）

かの証空上人は、安養の教門に入しより、
如来徳水を黒谷の流にうけ、
法幢を西山の峯にそはたつ、
天氣秀発し自解明朗なり。
奇瑞を得て曼荼羅に十冊の
抄を製作し、甚源の奥蔵を
しめし、広説衆辟の直説をと、
のふ。

（中略）

（第七段）

抑迎講の法事は、みなもと恵心の先
徳、叡山にしておこなひはしめ給ふ時、

寛印供奉常にこれを心にうけかひ

たまはすといへとも、有時この行事まことに

奇瑞あらたにして、虚空に花ふり異香

薫し、来迎のよそほひあることをみて、現に

信心肝にめいす故、今当寺の法会は横

川花台院よりうつす所なり、是極楽の

莊嚴を平生に見ることなし、娑婆相似の

舞樂終焉にあるへきしるしをしめす、

まことに大悲善巧の方便なり。

この「當麻寺縁起」は、享祿四年（一五三一）の製作で、詞書は三条西実隆も筆記しており、これについては『実隆公記』にも記述がある。このうち練供養に関する部分のみをあげた。注目すべきは迎講（練供養）の起源は恵心僧都が寛印供奉の協力により、延暦寺の横川花台院での迎講を當麻寺に移した、としている。これにより室町中期には練供養が行われていること、その起源は恵心僧都が始めたという伝承があったことがわかる。さらに証空上人が當麻曼荼羅を広く頒布したことに触れている。しかし練供養と証空上人との関係は何ら述べていない。

次に「庁中漫録」²⁷所載の欠年「當麻寺由来書」をあげる。

（前略）

旧記云、治承年中有兵火、金堂講堂二基塔鍾樓経

蔵坊舎尽炎上、曼陀羅堂巽角雖火付自消無火災

云々、到于今無火災、

（中略）

旧記云、毎歳四月十四日浮屠氏廿五人纏錦繡懸

璵珞着面成廿五菩薩形調律呂成歌舞奏管弦、是ハ

中将姫往生安養時諸菩薩来迎ス、模其様名云練供

養、但自中将姫時不絶如此、其後何世中絶、干時恵

心院僧都源信自製廿五菩薩面再興練供養、其后

年々依有法事面尽破壊、凡俗人補其闕、到于今勢

至觀音普賢三面者恵心院作相殘云々、

「序中漫録」は元禄年間に南都奉行所の玉井定時が収集した大和国各地の文献や伝承を各地の史料所蔵者から直接筆写したものである。先の「當麻寺縁起（享禄本）」もこの「序中漫録」に収録されている。この「當麻寺由来書」によると、僧侶二十五人が菩薩の形をし、舞い、管弦を鳴らす。これは中将姫が往生する時に菩薩が来迎し練供養がはじまった。しかしその後中絶したが、恵心僧都源信が自ら二十五個の菩薩面を製作し練供養を再興し、その後毎年法事があるのが破壊され、俗人が補充した。今は勢至・觀音・普賢の三面が源信作である、としている。すなわち源信が来迎会を始めたとする先の享禄本の「當麻寺縁起」と同内容である。

欠年「當麻寺伽藍其外之旧跡私記」（「中之坊文書」）に

跣供養

恵心入滅六十八代後一條

院寛仁元年六月十日、明和

四年迄七百四十壹年筈

とある。この文書は當麻寺中之坊にある真言宗方から伝えられた當麻寺の由来

書を集めて簡潔に纏めたものである。そのなかに「跣供養」とあって、恵心僧都源信が亡くなった時（寛仁元年（一〇一七）から明和四年（一七六七）まで七四一年経っているとしているが、ここでも跣供養は恵心僧都が始めたとしている。

また練供養の縁起ではないが、當麻寺内の子院に次のような由緒書がある。

一、和州葛下郡二上山當麻寺極楽堂由緒

一、恵心僧都御開基、僧都同郡良福寺村之素性

也、常二二上山二登執行シ、或時一夏毎日登山而

行給、夏之末二至而弥陀之本身山より高現

半身給、僧都拝畢而下山而蓮華谷之

辺二造堂ヲ、是二而彼尊容を画為安置

被為堂之本尊与、其後念仏之行者

証円住持為浄土宗与、

一、中興開山生国姓氏剃髮之師等都而知不申候、

一、中興開山帰寂明応五丙辰年十二月十五日、

一、由緒者當麻寺本願宗胤上人門派、

當麻寺奥院末寺
極楽堂

元禄九丙子年九月日 円可（印）

この元禄九年（一六九六）九月「和州當麻寺奥院惣末寺由緒控帳」所載「當麻寺極楽堂由緒書」（「奥院文書」）は、當麻寺奥院の末寺で當麻寺境内にある極楽堂（極楽院）の由緒である。この「和州當麻寺奥院惣末寺由緒控帳」は當麻寺奥院の末寺帳で、元禄九年に末寺からの由緒書を纏めたものである。全部で五三ヶ寺の末寺が記載されているが、そのうち當麻寺善願院と當麻寺極楽堂

（極楽院）の二ヶ寺が恵心僧都を開基としている。そのうちの極楽院の由緒書を記したものである。これによると、恵心僧都は當麻寺の近くの良福寺村で生まれたこと、常に二上山を修行の場とし山越え阿弥陀を感得し、その姿を图画し、本尊とした。その後念仏行者の証円が住持となり浄土宗となった。この証円はあるいは証空かもしれない。

以上から當麻寺縁起や由来書などで恵心僧都源信が登場する。また証空もわずかだが名前が見える。

6 証空と練供養

善慧房証空上人（一一七七―一二四七）は法然上人の高弟で、寛喜元年（一二二九）に當麻寺に参詣し、當麻曼荼羅を拝観している。この時にこの曼荼羅が唐の善導大師の「観無量寿経疏」を图像化したものと見抜き、以後當麻曼荼羅の頒布を進めた。寛喜元年の當麻寺参詣曼荼羅拝観に當麻寺に訪れたことを記したのが「當麻曼陀羅注」である。拝観した時の一文は以下の通りである。

（前略）予拜之随喜感涙難禁。而即引率上足弟子二十五人而参詣彼當麻寺。静拜此变相。是非観経曼荼羅。即慥織善導和尚観経疏四卷文義。震旦和尚観経疏与日本生身弥陀所織顯曼陀羅。文義一同。而一分無所遠。（中略）都召謁南都并天王寺楽人舞人。尋楽伎之具。凡爲開此曼陀羅相儀。莫不窺求内典外典世間出世一切万法。是則秘藏法門也。（下略）

これによると、先に當麻寺僧から曼荼羅の存在と概略を知らされた証空は、寛喜元年三月當麻曼荼羅拝観に二十五人の高弟を引き連れて當麻寺を訪れた。この時この曼荼羅は浄土信仰を大成した唐の善導大師が著した「観無量寿経疏」の内容と一致することを確認するとともに、南都と四天王寺の楽人と舞人を召

し連れ音楽を奏で、この曼荼羅の相（姿、様子）を演じたという。これこそが練供養であり、先の二十五人の高弟は来迎の菩薩を演じたのではないか。この頃は既に當麻曼荼羅にまつわる中将姫説話も既に成立していたとみられ、証空は中将姫の極楽往生を演じさせたものと見られる。

証空はこの當麻寺参詣の時に、當麻寺に田地を寄進している。寛喜元年（一二二九）三月二十六日「証空田地寄進状」はその時に金堂に陰刻した寄進状である。

合参段者

右件田者□□□□□土□□被
催□旨之□□□□当寺参詣、然間拜
見化人蓮織曼荼羅、往生極樂之
浄□□曼荼羅爲躰、観経解尺之中、殊
順善導証定之義、章段分別之趣、不違短
慮料簡之旨、信心之□□□□弥陀仏
之一望、宛省対生身、菩薩衆之調管
弦、□疑發起□□、是浄土之要門□当□
濁世之出離在此砌、本願□□濟世□□
□、件田□□宛不断
念仏供料、於□□□永所施入也、
□□□□、仍所記如件、

寛喜元年己丑三月廿六日 沙門（花押）敬白

ここにも証空が當麻曼荼羅を拝観に當麻寺に参詣し、當麻曼荼羅が善導大師の「観経解釈」であると理解し、「菩薩衆之調管弦」をしたが、これは浄土を示し

たものであるとしており、内容的には先の「當麻曼陀羅注」と同じである。

平安時代の迎講が地方の寺院ではじめて挙行する場合は、「京ヨリ舞人・楽人ナムト呼び下シテ、心ニ入レテ令行メケレバ」とあるように、他所から舞人や楽人を連れてきて始めたように、當麻寺の場合も京都から二十五人の僧侶、南都や天王寺から楽人や舞人を連れて當麻寺で練供養を始めたようである。

証空が當麻曼荼羅を様々な大きさに写して各地に配布したことは、戦国時代の永享八年（一四三六）に浄土宗鎮西派の第八祖聖聰上人が記した「當麻曼陀羅疏」に記している。

「當麻曼陀羅疏」（『浄土宗全書』十三）に

（前略）其後法然上人御弟子小坂善恵上人者。可奉移曼陀羅之志在之。宇津宮実相房相議候。

干時當麻寺衆僧曰。寺僧外不可許之有返事。干時上人勤寺役列供僧。如意被移曼陀羅。此時無御衣絹。後鳥羽院御后宜秋門院九

条殿嫡女御願。手自蓮系取副常系有御宮。爰善恵上人宇津宮実相房相議。大画師播磨法眼澄円仰付令書之。是即第二転曼陀羅也。此曼陀羅善恵上人

九条殿御沙汰。嘉禎三年丁酉九月末。上人弟子観信房也。此人王八十六代帝四条院秀仁治天第五年也。其後又善恵上人写一幅。奉安置當麻寺西竜御

殿。是則第三転曼陀羅也。（下略）

ここに出てくる「法然上人御弟子小坂善恵上人」は証空のことであるが、これによると証空は當麻曼荼羅の写を作成しようとしたが、當麻寺僧が寺僧の外は写を作成することは許されない、といって断つたので、後鳥羽院の皇后である宜秋門院任子の御願とし、宇都宮実相房と相談して播磨法眼澄円に當麻曼荼羅を写し、さらに転写して當麻寺西竜御殿に安置したという。もしこれが事実なら、証空は「西竜御殿」という西山派の寺院を當麻寺山内に設けていたこと

になる。恐らく當麻寺の子院として存在していたのであろう。このように証空は寛喜元年（一二二九）に當麻寺にて練供養を始めるとともに、西山派の寺院を當麻寺山内に置いたことにもなる。

7 証空以後の練供養の系譜

當麻寺練供養を主催する護念院や有力な浄土宗の子院である念仏院の中世の様子を記す次のような二通の文書がある。

寛文中「浄土宗訴申二付返答書」（中之坊文書）

從浄土宗破損被上候返答

一、當麻寺二浄土宗在之事ハ式百年二候事、

往生院と申ハ知恩院始十三代目清阿上人

以来事、護念院ハ高野聖之居申

所を万歳殿拝領之地候故我か孫々を入

浄土寺二押之成被申候、念仏院ハ真言宗

中坊之隠居所にて是ハ万茶羅讃説之

ためにせいさん立儀二候處ニ今ちんせいには

成被申儀不能分別候事、

欠年「浄土宗濫觴之事」（中之坊文書）享保九年「享保九辰争論之控」（所収）

（前略）

享保ノ時代々奥院ト改ルナリ、護念院ハ高野聖ヲモト

メテ幸蓮社專誉上人始ナリ、念仏院ハ南別所トテ中ノ坊

隠居寺ニテ候、浄土宗永禄年中ニモ当山ニ有事ハ古書ニ

相見ユナレトモ、内陣ニテ出勤ナトハ無之、曼陀羅堂外陣テ相

勤有之候、

この二点の文書は、いずれも近世に當麻寺山内の真言宗方と浄土宗方の間で起こった相論での真言方の訴状である。前者の寛文の「返答書」は、當麻寺の浄土宗寺院の由来を述べているが、その中に護念院は高野聖がはじめた子院であるが、地域の領主である万歳殿が一族を入寺させ、浄土宗寺院とした、としている。つまりもとは高野聖の寺であり浄土宗寺院ではなかったが、万歳氏が代々入寺する寺院となり、万歳氏により浄土宗寺院化したという。後者の「浄土宗濫觴之事」では護念院の初代の住持は幸蓮社専誉上人である、としている。護念院の創建年代が何時かは不明だが、恐らく戦国時代であろう。

また双方の文書によると、念仏院は真言宗中之坊の隠居所である南別所に置かれた子院で、「是ハ曼茶羅讚説之ために」せいさん、つまり西山派が建てた子院である。「曼茶羅讚説」であるから、當麻曼茶羅を信仰するために建てられた子院であろう。すなわち念仏院は西山派の拠点であった。その前身はおそらく証空が當麻寺内に建てた當麻寺西竜御殿と思われる。その後念仏院は西山派から奥院の所属する鎮西派に転派している。

文明十六年（一四八四）一月十一日「勸進桑門敬白」³¹は、文明十六年に當麻寺南別所念仏院を修造するための勸進状である。

勸進桑門 敬白

請特欲蒙十方檀那資助於倭州當麻寺令修造

南別所念仏院子細状

（中略）

粵於当山在一人高僧、諱号樂生上人、四条院治
天下嘉禎歲次乙未誕生、稟藤家産業凭帝都肇持

木刃雖携草凡入聖之修行、惡卜蟄居修習佗力本

願之念仏、斯乃於当寺者浄土弘宗先達也、即於梵

閣南別所建一字号念仏院、自創草以来已逮二百

余載故上葺漸損霰滴侵万徳尊容、

（中略）

文明十六年正月十一日

勸進沙門敬白

これによると、嘉禎二年（一二三五）に藤原氏の子として生まれた高僧である樂生上人は當麻寺念仏を広めた先達であり、當麻寺南別所に念仏院を草創して以来二〇〇年余になり、文明十六年の今では建物が雨漏りするなど傷んでいたので修理したい、とのことである。

この嘉禎二年（一二三五）に樂生上人が生まれたので、樂生上人が當麻寺に入寺したのは証空が當麻寺を訪れた寛喜元年（一二二九）より五六年後の弘安八年（一二八五）であり、當麻寺内の浄土宗西山派の子院として、証空の信仰を引き継ぐ役割を果たす寺院であり、その引き継いだ信仰の中には証空のはじめた練供養も含まれていたものと見られる。つまり、念仏院は西山派の子院で練供養を主催していたのである。先の寛文年中の「浄土宗訴申二付返答書」によると、寛文より以前に西山派の念仏院は鎮西派に転派していたことになる。

それでは念仏院の主催する練供養が如何にして護念院に移ったのか。先述したように戦国時代に護念院が高野聖により創建され、万歳氏の援助で幸蓮社専誉上人により浄土宗寺院に転派した。その後、それまで當麻寺浄土宗の有力寺院で練供養を主催していた念仏院から練供養の権利を護念院へ移し、以後護念院が練供養を主催するようになったのではないかと考えられる。次の史料は当時護念院が如何に有力であったか、を示している。

「春日神社文書」欠年「平田庄算用帳」に³³

(表紙)

「平田庄名目方」

万歳領中

(中略)

六町

辰巳衆所 中坊^{今ハ}

(中略)

十八町七段小

當麻寺

(中略)

万歳領

六町二反

護念院

一町

市^ハ 喜三郎

三町四反

徳藏院

(中略)

一町六段小

御影堂

一町五段大

南別所

(中略)

供田

一町一反半

當麻堂

一町一反小

来迎院

六段

中坊

四段

地蔵院

(中略)

以上万歳領出田分

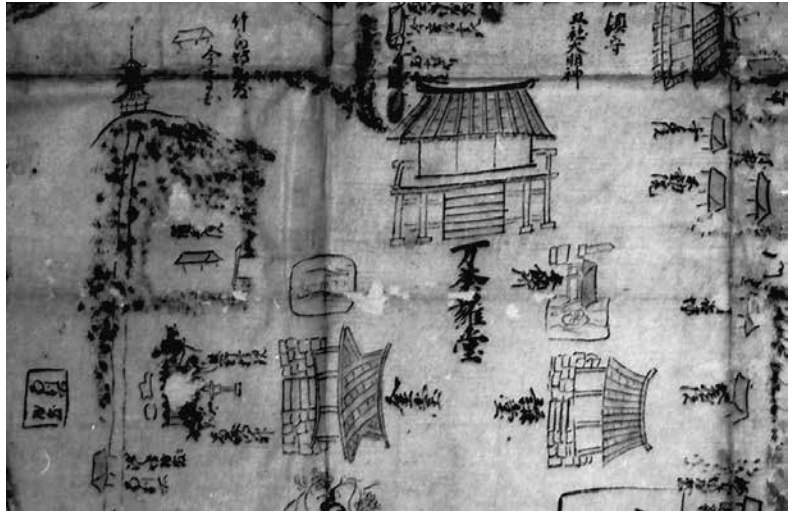
とある。これによると、平田庄内の万歳領に當麻寺本寺が一八町七段余、當麻寺中之坊は六町と六段、南別所一町一反大、来迎院一町一反小、地蔵院四反に對して、護念院は六町二段であり、子院のなかでは最も多い。やはり万歳氏は一族を入寺させる護念院を特別に扱っていたことがわかる。

なお近世の當麻寺浄土宗は當麻寺の子院として奥院・護念院・念仏院の三ヶ院であり、それ以外の浄土宗の子院はこれら三ヶ院の末寺となっているが、その理由は鎮西派の拠点としての奥院、万歳氏の勢力を背景にした護念院、西山派の子院だった念仏院であったからである。

8 元亀年中當麻寺絵図と護念院

當麻寺西南院に「元亀年中當麻寺絵図」がある。³⁴ この右下表書に、「此図ハ古書図等ヨリ取調猶古老先輩等之口説ニ依而考フルニ全ク二百六十年前即チ元亀年間写図面タル事明也、爲後日付記之 明治廿八年十月」とある。これによると、明治二十八年に、この絵図は元亀年中であるとの判断をした、としている。元亀年間の絵図であるか否かは不明でその根拠もわからないが、図面を見る限り多くの小規模な子院でその多くは「東南院 今ハ久三郎」「新坊 今ハ新二郎」など、子院に俗名が書かれていること、また本堂である万茶羅堂の前方左に勧進聖の集合地である「本願所」がある、など中世的な記述があり、間違いなく元亀年間またはそれに近い中世の絵図と見られる。

この絵図は江戸時代以前の當麻寺の姿を示している貴重なものである。真偽のほどは不明であるが、半僧半俗勧進聖や道者とみられる子院名も多数あり、当時の當麻寺境内の状況がわかる。本堂である曼荼羅堂前方右には勧進聖の集合地である「本願所」もあって、戦国時代の當麻寺の姿を示している。注目す



元亀年中當麻寺絵図（部分）
曼荼羅堂本願所、護念院の名が見える

べきは曼荼羅堂の左隣に護念院があり、今の護念院と同じ位置にある。しかもその規模は往生院（奥院）とともに最も大きい。このことから護念院は当時もとても勢力があったことがわかるとともに、練供養を主催するのに都合の良い位置を占めている。

9 おわりに

當麻寺練供養は、平安時代に各地で行われた阿弥陀来迎を表す迎講と、當麻寺での當麻曼荼羅にまつわる當麻曼荼羅縁起中將姫説話の成立という二つの流れのなかで當麻寺練供養が成立した。その時期は當麻曼荼羅縁起・中將姫説話が成立した鎌倉時代であり、西山派の祖である善慧房証空が當麻寺を訪れた寛喜元年（一二二九）に始まった。その後西山派の子院である念仏院が楽生上人により當麻寺中之坊の隠居所である南別所に建てられ、念仏院がその後練供養を引き継いで運営してきた。この時から練供養は西山派が主導して行ってきたが、真言宗方も参加していた。戦国時代になり、護念院が創建され、当初は高野聖の拠点であったが、當麻寺周辺の領主である万歳氏が手に入れ

土宗寺院として代々子孫を入寺させていた。万歳氏の力で念仏院が主催していた練供養の運営を護念院が引き継ぐことになり、近世を迎えた。念仏院は西山派であったが、鎮西派に転派した。これにより浄土宗子院は奥院、護念院、念仏院の三院となった。

當麻寺縁起や脚供養縁起では源信が始めたとの伝があるが、當麻寺に関わった確かな史料はなく、中將姫説話と二十五菩薩来迎を融合させた現在の形式になるのは時期早々であり、やはり証空の時代まで待たねばならない。

以上から、當麻寺練供養は西山派の証空上人が寛喜元年（一二二九）にはじめたもので、その後西山派の念仏院が引き継ぎ、さらに戦国時代に護念院が念仏院から引き継いで行われていった。

- 1 この行事は「来迎会」「練供養」「脚供養」「お練り」「迎接会」「迎接の講」「来迎の儀」「聖衆来迎の儀式」など様々な名称があるが、ここでは「練供養」で統一する。
- 2 關信子氏によると全国で迎講・来迎会が行われているのは一五例、かつてしていたのを併せると二九例ある。
- 3 關信子「迎講阿弥陀像」考Ⅰ―當麻寺の来迎会と弘法寺の迎講阿弥陀像―（『仏教芸術』二二二号、仏教芸術学会編、毎日新聞社、一九九五年）、同「迎講阿弥陀像」考Ⅱ―當麻寺の迎講阿弥陀像―（『仏教芸術』二二三号、仏教芸術学会編、毎日新聞社、一九九五年）、同「迎講阿弥陀像」考Ⅲ―米山寺と誕生寺の迎講阿弥陀像―（『仏教芸術』二二四号、仏教芸術学会編、毎日新聞社、一九九六年）
- 4 「建久御巡礼記」ほか
- 5 「中之坊文書」欠年「山之由来」
- 6 「中之坊文書」享保九年「真言方訴訟之控」
- 7 「中之坊文書」欠年「山之由来」、「同文書」文化一五年四月一三日「和州葛下郡二上山万法藏院當麻寺略記」
- 8 浦西勉「大和二上山のダケノボリ―郷村の人々の山信仰―」（『岬なる山に折る』、山村民俗の会、一九九〇年）
- 9 「春日大社文書」欠年「平田庄算用帳」
- 10 「春日大社文書」欠年「興福寺末寺知行高書上」

10 曼荼羅堂外陣修理銘、『大和古寺大観 二 当麻寺』（岩波書店、一九七八年）、二頁下

11 毛利久「当麻寺の歴史と美術」（『大和古寺大観 二 当麻寺』前掲）

12 「遍聖絵」巻八

13 福山敏男「当麻寺の歴史」（『仏教芸術』四五号、仏教芸術学会編、毎日新聞社、一九六一年）

14 『校刊美術史料 寺院篇 上』（藤田経世編、中央公論美術出版、一九七二年）

15 金志虎『当麻寺の歴史と信仰』（勉誠出版、二〇一五年）

16 『大日本仏教全書』第六三卷

17 『大日本仏教全書』第八四卷寺誌部二「当麻寺文書」

18 『大日本仏教全書』第八四卷寺誌部二「当麻寺文書」

19 西南院所蔵「元龜年間當麻寺境内図」

20 「本光国師日記」『大日本仏教全書』七九卷日記部

21 柴田実「当麻寺と来迎会―序説―」（『当麻寺来迎会民俗資料緊急調査報告書』、元興寺仏教民俗資料研究所編、国書刊行会、一九七五年）

伊藤唯真「来迎会―その思想的周辺―」（『当麻寺来迎会民俗資料緊急調査報告書』前掲）

22 『中将姫説話の調査研究報告書』（財）元興寺文化財研究所、一九八三年）

23 入江宣子・福原敏男「二十五菩薩練供養」（『東京都の民俗芸能―東京都民俗芸能調査報告書』、東京都教育庁地域教育支援部管理課編刊、二〇一二年）

24 前掲2と同じ。

25 『当麻寺来迎会民俗資料緊急調査報告書』（前掲）

26 『当麻寺―極楽浄土へのあこがれ―』（奈良国立博物館、二〇一三年）

27 奈良県立図書館情報館所蔵影印本「庁中漫録 葛下郡」

28 『大日本仏教全書』

29 「鎌倉遺文・補遺」九七六号

30 「始丹後国迎講聖人、往生語第廿三」（『今昔物語集 卷第十五』）

31 「庁中漫録・葛下郡」所載

32 『当麻町史』（当麻町史編集委員会編、当麻町教育委員会、一九七六年）五二五頁

33 『改訂新庄町史 史料編』（新庄町史編集委員会編、新庄町、一九八四年）

34 『国立歴史民俗博物館資料調査報告書 一二 社寺境内図資料集成 二 近畿・補遺』（国立歴史民俗博物館、二〇〇二年）二九九頁

*

本稿で使用した「中之坊文書」「奥院文書」「西南院文書」は、元興寺文化財研

究所在職中に、私が調査写真撮影したものであり、本稿作成にあたり同研究所から拝借した。

（吉井敏幸）

第三章 當麻寺練供養における諸堂の準備と莊嚴

1 はじめに

當麻寺練供養は西方浄土からの二十五菩薩来迎を具現化した来迎会で、二十五菩薩のお渡りに伴って曼荼羅堂、娑婆堂などでは法要が勤められ、それぞれの仏前は打敷や供物などによって莊嚴される。練供養の際に莊嚴される会場として主に、曼荼羅堂、曼荼羅堂に仮設される花筵場^{かえんば}、曼荼羅堂と来迎橋で結ばれる娑婆堂、二十五菩薩の控えとなる護念院本堂の四ヶ所が挙げられる。

曼荼羅堂は練供養における信仰の中心とも言える堂であり、當麻曼荼羅と堂内諸仏への莊嚴がなされ、さらに、曼荼羅堂東側に仮設された花筵場は真言方の法要会場となる。また、娑婆堂はお渡りの際に浄土方の法要会場となり、護念院本堂は二十五菩薩の面や中将姫の輿を安置する場所としての設えを行なう。本稿では、これらの諸堂における準備と莊嚴の様相について報告する。



曼荼羅堂・本尊當麻曼荼羅前の打敷と供物（平成31年）



曼荼羅堂・来迎仏の打敷と供物（平成31年）



曼荼羅堂・中将姫の打敷と供物（平成31年）

2 諸堂の準備と莊嚴

曼荼羅堂

曼荼羅堂の内部は、曼荼羅があるところを内陣、そこから東側を外陣、南側にある弘法大師を祀っている部屋を「弘法大師参籠の間」、北側にある十一面観音を祀っている部屋を「織殿の間」と呼んでいる。

練供養前後の三日間（平成三十一年は四月十三日、十四日、十五日）は裏板曼荼羅が開帳され、内陣において寺宝が特別公開されるにあたり、その準備が當麻寺四ヶ寺（奥院・護念院・西南院・中之坊）により行われる。その時期に併せ、祀っている諸尊像の前には打敷をかける。曼荼羅の前机に紫地金襴の打敷、来迎仏（阿弥陀如来立像）の前机に赤地卍紋の打敷、中将姫像の前机二つにも赤地金襴の打敷（角と三角）をかける。さらに、それぞれに供物を供えるが、平成三十一年では曼荼羅の前には朱塗三宝に精進供（生御膳）、朱塗高坏に餅（二重）、朱塗皿に乾物が供えられる。なお、精進供（生御膳）とは野菜

などを盛った供え物であるが、平成三十一年は大根・人參・高野豆腐（紅白水引付）・米・野菜であった。来迎仏の前には香炉・華瓶・燭台とともに、朱塗三宝に精進供（生御膳）、朱塗高坏に餅（二重）、朱塗皿に乾物が供えられ、中将姫像の前にも同様のものが供えられる。なお、裏板曼荼羅の前にも小さな前机があり、香炉・華瓶・燭台とともに、朱塗皿に乾物が供えられる。その他、曼荼羅堂内には弘法大師、十二面観音、役行者が祀られているが、一様に香炉・華瓶・燭台と朱塗皿に乾物が供えられる。なお、それぞれの華瓶に仏花として生けてあるのは全て槿である。これら仏花と精進供（生御膳）の準備はその年の寺務所当番寺院が行なうことになっており、平成三十一年は西南院が当番であった。

練供養の直前には曼荼羅堂内の拝観を停止し、外陣も準備が必要となる。外陣正面にある常花一对と香炉が載っている前机を外陣北側の壁に移動させる。続いて、賽銭箱、参拝者用の線香を立てる香炉も外陣北側の壁に移動させる。



曼荼羅堂・裏板曼荼羅前の供物（平成31年）



花庭場の設えと仏具（平成31年）



花庭場の導師席礼盤と仏具（平成31年）



娑婆堂の外観（平成31年）

その後、外陣正面の格子戸を開き、練供養の行列出発を待つのである。

花庭場

花庭場の部材は曼荼羅堂の北側小部屋に収納されており、練供養の当日に運び出されて組み上げられる。その後、仏具等を準備するのは毎年、真言方の僧侶が行なうが、用いる仏具は曼荼羅堂の各所から集めてこれに充てる。花庭場には導師が着座する前机、脇机、馨を伴った礼盤と、磬子の横にもう一つ礼盤が置かれている。この磬子の横に置かれた礼盤と導師の脇机、馨、六器、火舎香炉は曼荼羅堂「弘法大師参籠の間」から借りてきたものである。また、三つ具足（香炉・華瓶・燭台）は曼荼羅堂の役行者尊前から借り、磬子は曼荼羅堂の曼荼羅厨子前に置かれているものを借りてくる。なお、導師の前机と礼盤、樂太鼓のみ花庭場の部材とともに曼荼羅堂の北側小部屋に納められているものを用いる。その他、花庭場には僧侶が座る座布団や法要で用いる鉞を置いてお

く。導師の前机に置く三つ具足は、花庭場から落下する危険性があるので置かないこともある。これらの仏具は練供養が終わった後、すぐさま真言方の僧侶によって本来あった場所に戻され、夕刻には花庭場そのものも解体され、部材は曼荼羅堂の北側小部屋に納められる。

娑婆堂

娑婆堂内には来迎橋の足場板などが納められており、練供養当日の朝に来迎橋を設営する方々によって開堂されて準備が行なわれる。娑婆堂の正面の戸は取り外し、左右の蔀戸は引き上げて西面・南面の戸を開放する。娑婆堂は土間の建物であるが、須弥壇周りのみ板敷となっている。須弥壇には阿弥陀如来立像が祀られて、その前には前机と香炉・華瓶・燭台が置かれているが、練供養の際は華瓶に菊などの仏花が供えられるのみで、その他の特別な供物や飾りなどはない。また、堂内の土間両側には娑婆堂での法要で座するための椅子、中央



娑婆堂の設え（平成31年）



護念院本堂・菩薩面と供物（平成29年）



護念院本堂・中将姫輿の打敷と供物（平成31年）



護念院本堂・本尊の打敷と供物（平成31年）

には輿を置くための馬二脚を置いておく。

護念院本堂

護念院本堂では練供養当日までに仏前の打敷や本堂内の幕などを用意する。特に通常と異なるのは本堂の南側に菩薩面を飾ることであり、幕を張って菩薩面を置く台を設える。練供養当日の早朝より、菩薩講の方々と菩薩面を蔵から出して本堂に並べる。また、練供養の際に持つ法如（中将姫）化生像も併せて菩薩面の前にある机に安置される。菩薩面および法如（中将姫）化生像には香炉・華瓶・燭台、朱塗膳に生御膳、白木三宝に餅（二重）が供物として供えられる。本堂北側には中将姫の輿があるが、中将姫像の前には打敷がかけられ、香炉・華瓶・燭台、朱塗膳に生御膳、白木三宝に餅（二重）、陶器の茶湯器に水が供えられる。本堂中央の本尊前の打敷は練供養の時だけのものに取り換える。本尊前の前机には香炉・華瓶・燭台・常花一对、朱塗懸盤に生御膳、白木三宝

に餅（二重）、朱塗高坏に果物が供えられる。本堂内で華瓶に供える仏花には全て檀とユリを用いる。供物には餅と生御膳（人參、高野豆腐、果物、寒天、胡瓜）を供えるが、これは練供養のための特別な供物であり、生御膳は当日に作り供えるものである。

なお、この日は先祖の回向法要を受け付けており、本堂北側には受付を設ける。回向法要を申し込んだ人は板塔婆を書いてもらい、本堂で随時に法要を行なってもらう。また、練供養が始まるまでは菩薩面を一般に公開するともに、僧侶による説明があり、参拝者は菩薩面を被せてもらい、「南無阿弥陀仏」と唱えて参拝する。

3 おわりに

このように、當麻寺練供養における諸堂の準備と荘厳について、曼荼羅室内の荘嚴は當麻寺四ヶ寺（奥院・護念院・西南院・中之坊）で行ない、当日の仏花と精進供（生御前）は、寺務所当番寺院が準備する。また、花筵場の法要会場は真言方の西南院と中之坊が担当、護念院本堂は護念院（浄土方）によって行なわれ、花筵場の仮設と娑婆堂の開堂は主に設営を担当する建設会社によって行なわれる。

これらのあり方は當麻寺練供養が真言方と浄土方に分かれて法要を執り行なっていること、さらに、當麻寺の寺務運営が子院を中心としながら、當麻寺の中心伽藍を護持していることが大きく関係していると言えるだろう。

（調査年月日 二〇一九年四月十四日）

（写真・文責 山本潤）

第四章 練供養会式の次第と構成

1 練り初め

平成三十年までは、毎年四月二十九日（みどりの日）に、浄土方の子院のひとつ護念院で練り初めが行われ、平成三十一年からは三月最終日曜日に行われるようになった。

菩薩講の各組の人たちが集まり、観音菩薩・勢至菩薩・普賢菩薩の三菩薩を除いた菩薩・天童役の配役を籤で決める。三菩薩には、所作があり、地元の當麻組が務めることになっているが、他の役には決まった所作はない。

當麻組の人たちは午前八時頃に護念院の庫裏に集まり、準備にとりかかる。男性たちは罫紙を切つてこよりを作り、先の番号を書いて籤を作る。薄紙の罫紙（罫紙高級薄紙B4和紙藍刷）を幅約2cmで縦に切り、上から振じつて下端5cmほどを残し、残した部分に漢数字を墨書する。籤は、二五本つくる。



写真1 籤をつくる



写真2 護念院庫裏での調理



写真3 中将姫へのお供え



写真4 護念院での法要

女性たちは台所で調理をし、本堂の法如（中将姫）坐像の輿と本尊の前卓に供える靈膳と、法要前の食事（約八〇人前）を用意する。

午前一〇時頃になると、菩薩講の各組の人たちが集まりだし、當麻講の人が受け付ける。「各村菩薩講連名史」の長帳に印をつけ、初穂を預かる（勝根と今在家の人たちの初穂は年末に集める）。各菩薩講の名簿を渡し、修正があれば訂正して提出してもらう。卒塔婆の希望があれば、當麻講の人たちが塔婆書きをする。この時、菩薩講の一年間の運営費として、米一升を持参することになっている（近年は金納が多い）。また、希望者は回向を申し込む。

午前一一時頃、靈膳を内陣の前卓と法如坐像の輿に供える。いずれも朱塗りの椀・膳で、蓋は使用しない。法如坐像の輿の方が小ぶりで、献立は飯椀、汁椀（茶葉で代用）、平皿（野菜の煮物）、壺椀（白和え）、高坏（漬物）に箸を添える。

午前一二時半頃になると、當麻組の女性たちが作った昼食を、菩薩講の各組



写真5 籤引き



写真6 練り初め



写真7 練り初め (奉奏舞)

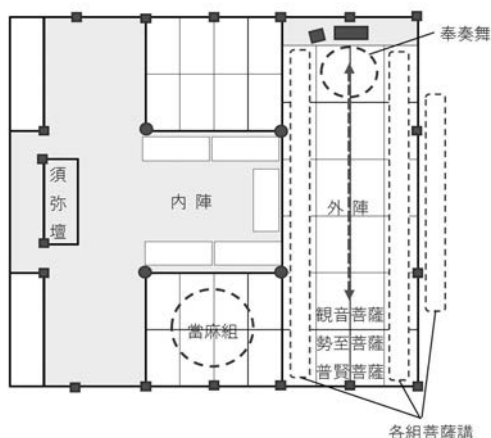


図1 護念院本堂での練り初めの位置図 練り初め

の人たちがいただく。飯碗、汁椀（吸い物）、平皿（野菜の煮物、蓋付き）、小鉢（白和え）、焼皿（鱈）の五品で、机ごとに漬物の鉢を置く。

午後一時、護念院本堂の喚鐘を役僧が打つのを合図に、菩薩講の各組の人たちは本堂に集まる。法要があり、卒塔婆供養を依頼した人は、読み上げられると正面に進んで、焼香をする。

午後二時から、菩薩面の抽選がある。當座組の人たちが、菩薩講の各組を名簿順に呼び出し、籤を入れた封筒を入れた籤をひかせる。籤の結果は「菩薩講抽選番号控」に記帳する。籤を引いた後、各組の人は衣装の引換札として木札を持ち帰る。この札は古いもので、なかには元禄六年（一六九三）の銘のある札もある。住職から、駒札の由緒や使用方法、練供養当日の持ち物などの説明があり、介添え役の紋付き袴のレンタル及び着付けの案内などもある。

その後、午後二時半から観音菩薩、勢至菩薩、普賢菩薩の三菩薩による練り初めが行われる。まず、外陣の北端に小卓を出し、三方に載せた法如坐像、三

具足（香炉、花瓶、燭台）を載せ、娑婆堂に見立てる。薨戸を開けて、明るくするとともに、正面の縁からも見られるようにする。菩薩講の各組の人たちは、外陣の東西に分かれて着座し、さらには縁に出て外から見る人もいる。

三菩薩は、外陣の南端で待機し、護念院の住職は、外陣の北端の小卓の向かって左側に座る。住職は「来迎和讃」の本を持ち、扇子（中啓ではない）を胸元に挿す。

住職が来迎和讃を朗誦し、「時に大悲観世音 ようやく歩み近づきて」の「近づきて」の後、右手の拍子木で床を打つ。まず、小さく一回、次に大きく一回。それを合図に観音菩薩が独特の所作をしながら歩き出し、続いて勢至菩薩、普賢菩薩も歩き出す。小卓の前で、奉奏舞を行い、再び外陣の南端に向かって歩く。

菩薩講の各組の人たちは、当日は菩薩面を被っており、娑婆堂での様子は見られない。この練り初めによって体験することができるのである。

午後三時頃には解散となる。

「史料1」

菩薩役 ご奉仕についての心得

一 菩薩役の片 持ち物

・さらし 手ぬぐい 日本タオルなど

・風呂敷（菩薩役の方の服を包む）

二 付き添えの方 持ち物

・羽織 袴 白足袋

・念珠

・扇子

・羽織の紐は白 *草履は寺で準備します

三 その他

・午後二時半より木札と衣装・菩薩面を引き換えます。

・当院での弁当持ち込みなど飲食はできません。

・全面禁煙となっております。

・お身内の方は二名以内に制限しております。

以上

◇お塔婆回向のお申し込み

一、日時 五月十四日（日） 十時～一四時半まで

回向料 一霊二万円

2 来迎橋の設営

毎年五月十日ごろ、練供養会式に使用される来迎橋を設置する。平成三十年は五月十一日に行われた。

橋は、曼荼羅堂の南面と護念院の本堂北側の間の南北に架かる短い橋（約一七m、橋脚六、橋板七）と、曼荼羅堂（本堂）の正面（東側）から娑婆堂の少し手前までの東西に架かる長い橋（約九六m、橋脚三五、橋板三六）の二つが設置される。東西の長い橋は、曼荼羅堂から約四一mの地点（曼荼羅堂から一五番目の橋脚）でやや南に折れ、上空から見ると「へ」の字形を呈している。かつては、當麻青年団が従事していたが、昭和六十年五月に橋を新調して以降、製作にあたった地元建設業者が担当して

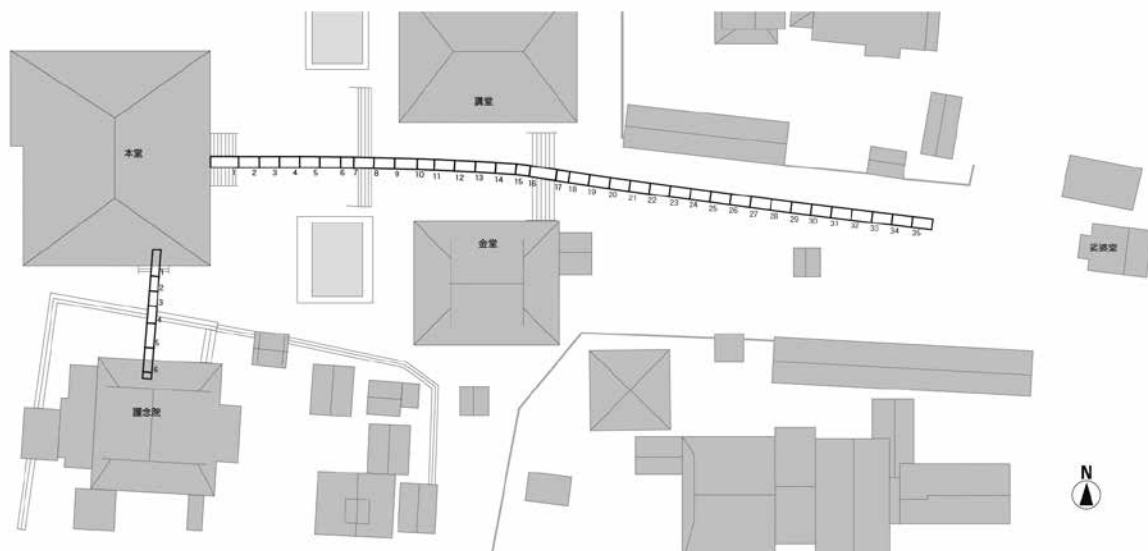


図2 来迎橋の設置位置（作図 中川未子）



写真8 橋板と橋桁（倉庫）



写真9 来迎橋の設営



写真10 菩薩役研修会（着付け確認）



写真11 菩薩役研修会（打合せ）

いる。

橋の部材は、橋板と橋脚そして、筋交いの三種である。筋交いは、橋脚数本ごとに橋脚と橋脚を結ぶ斜材である。これらの部材は、講堂と竹之坊の間の倉庫と、一部を娑婆堂に分けて収納している。作業は、まず橋脚を差し込む穴の探すところから始まる。穴は、コンクリート製で普段は鉄の蓋がかぶせられている。砂利の下に隠れているものも多く、曼荼羅堂側から順に穴の位置を探しながら蓋を開けていく。その後、橋脚に記された数字の順に橋脚を設置していく（曼荼羅堂側から順に第一号）。橋板は四人がかりで橋脚にのせるが、第一号橋脚から曼荼羅堂の縁にかかる橋板は、他の橋板よりも長大であり、トラック車積載型のクレーンを使用して設置している。

そのほか、大きな溝には角材を入れて段差をなくすなどの安全対策を講じる。なお、橋の設置が終わっても、通行の支障のないように、当日まで数箇所の橋板を外しておく。

3 菩薩役研修会

練供養会式が近づくこと三菩薩の最終練習が行われる。平成三十年は五月五日（土曜）と五月十二日（土曜）、いずれも午後七時から行われた。三菩薩を演じる人たちの所作の確認に加え、着付けを担当する人の手順の確認などの意味もある。午後一〇時頃解散となる。

〔史料2〕

菩薩役の研修会を開催のお知らせ

菩薩役は体力、精神力を必要とする大変な業です。特に近年は暑さにより体調を崩される方がおられます。どうぞ精進決済され、当日までの体調管理には十分お気をつけください。

また、面を被ることにより、精神的な苦しさを感じられる方もおられます。そこで、下記の日程で、菩薩役の研修会を執り行います。菩薩役の方

は出来るだけご参加頂き、会式までに菩薩面を体感し、会式に臨んで頂くことをお勧め致します。

以上

日時 五月 五日(土) 十九時より

五月十二日(土) 十九時より

場所 當麻寺護念院

持ち物 さらしや手ぬぐい等

(出来るだけ痛くならないよう面内の調整に使います)

・さらし 手ぬぐい 日本タオルなど

・風呂敷(菩薩役の方の服を包む)

二 付き添えの方 持ち物

・羽織 袴 白足袋

・念珠

・扇子

・羽織の紐は白 *草履は寺で準備します

三 その他

・午後二時半より木札と衣装・菩薩面を引き換えます。

・当院での弁当持ち込みなど飲食はできません。

・全面禁煙となっております。

・お身内の方は二名以内に制限しております。

◇お塔婆回向のお申し込み

一、日時 五月十四日(日) 十時～一四時半まで

回向料 一壺一万円

以上

4 練供養会式

かつては、中将姫が生身往生されたという旧暦三月十四日の一か月後、四月十四日に行われていた。『大乘院寺社雑事記』長祿三年(一四五九) 四月十四日条に「今日當麻寺迎講云々、毎年不退法会云々」、明応九年(一五〇〇) 同日条に「當麻寺迎講也、為結縁藤千代昨日下午向」とある。その後、五月十四日に行われるようになり、平成三十一年から四月十四日になった。

直前の練習

当日の朝、六時半頃から、當麻組の人たちが曼荼羅堂に集まり、最終打合せを行う。橋板もいったんはめる(橋板五枚程度)。衣装はつけないが、面だけは被って、視野の狭さに慣らす。小一時間練習をした後、護念院の本堂に向かい、面を並べたりして一般参拝の準備をする。

花筵場の設営

午前八時頃、曼荼羅堂の外陣北端の控外陣から、縁に設置する舞台の部材が運び出され、張り出し舞台(花筵場)が組み立てられ、五色の幔幕が張られる。



写真12 当日朝の練習



写真13 花筵場の設置

ここは、真言方の僧侶と楽人が着座する場所である。設置は小一時間で完了する。

特別拝観

当日は朝から護念院本堂で練供養会式の面や法如（中将姫）坐像の輿が公開されており、一般参拝客でにぎわう。近年は菩薩面を被って記念撮影をするのが人気である。内陣では、回向の法要が適宜行われる。中之坊では、當麻曼荼羅の内容を解説する絵解き（特に中之坊に伝わるものを「絵解き節」という）が行われる。

菩薩の着替え

正午頃から、菩薩や天童役の菩薩講の人々が護念院の大広間に参集しはじめる。午後二時頃に護念院本堂の一般公開を止め、午後二時半頃から菩薩講の人々の準備が始まる。ここで、木札と引換えに装束・面などを受け取り、大広間に移動して、菩薩の衣装に着替える。着付けは、當麻組の人たちがおこなう。



写真14 護念院で諸菩薩の面付け



写真15 法如（中将姫）坐像の輿が護念院を出発



写真16 浄土方の楽人が曼荼羅堂に並ぶ



写真17 護念院住職が曼荼羅堂へ渡る

衣装は、下着姿になって、まず下衣をつけ、その上に腰飾を廻す。次に上衣、

袈裟の順に着用する。袈裟は、右を輪にして腰に巻き、天衣を懸ける。面をつけた後、頭の後ろに輪光がくるように背に支持棒を結ぶ。最後に手袋をつける。それぞれ決まった持物は、護念院を出発する際に、後戸で受け取る。

当日は護念院の本堂の脇の北側の塀から曼荼羅堂にかけて仮橋が架けられている。定刻になると支度した諸菩薩と付添人などは順次この橋を渡って曼荼羅堂へ赴き、出番を待つ。

なお、當麻組が担当する観音菩薩・勢至菩薩・普賢菩薩の三菩薩は、そのほかの菩薩の準備が終わってから、着替える。

曼荼羅堂での準備

曼荼羅堂では、午後二時半ころから一般の参拝を止め、外陣に畳の養生のためポリエチレン製シートを敷く。来迎橋は、直前まで外してあった曼荼羅堂から数えて一枚目の橋板をかける。

なお、この日は、金堂と講堂の基壇が當麻寺関係者の招待席になる。西暦偶数年は、金堂が浄土方、講堂が真言方。奇数年は逆となっている。

中将姫の輿の移動

午後三時五〇分ごろ、一鐘（曼荼羅堂の北の控外陣に吊られた太鼓と鐘楼の鐘が鳴らされる）を合図に、法如坐像を載せた輿が、護念院から来迎橋を渡って娑婆堂へ移動する。輿は、浄土方の僧侶（一名）に先導され、四名が肩に載せて運ぶ。その頃、浄土方の僧侶のうち、護念院の住職は、曼荼羅堂に向かい、様々な差配をする。

曼荼羅堂への入堂

午後四時頃、二鐘を合図に西南院（真言方）の僧侶が曼荼羅堂の後戸から入堂し、中之坊（真言方）の僧侶は、中之坊の前辺りの仮設階段から来迎橋にのぼり、来迎橋の上を通り、曼荼羅堂の正面から入堂する。

同じ頃、浄土方の楽人が曼荼羅堂の後戸から内陣を通って外陣の北側に整列する。稚児行列は曼荼羅堂の外陣に並ぶ。真言方の僧侶は、内陣で「阿弥陀如



写真18 真言方の僧が内陣で礼拝



写真19 浄土宗の僧が内陣で礼拝

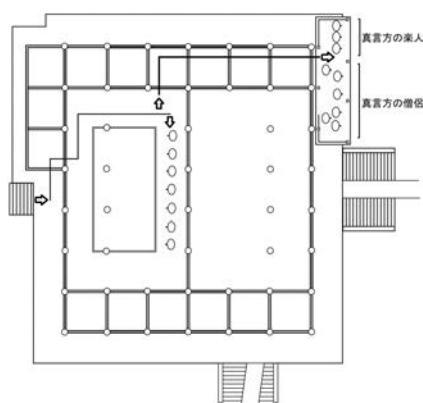


図3 真言方の僧侶と楽人

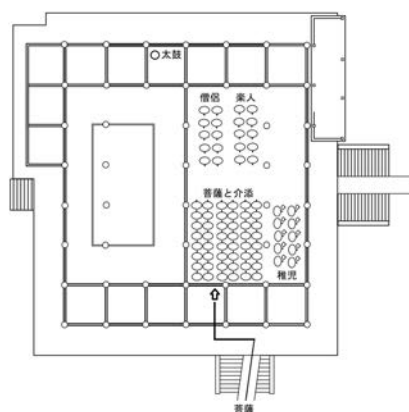


図4 浄土方の僧侶と菩薩

来根本陀羅尼」を読誦する。そして、真言方の楽人（他寺の僧侶）と共に、北の控外陣を通って曼荼羅堂正面の花筵場に着座する。

午後四時五分頃、三鐘を合図に、浄土方の僧侶（奥院、極楽院、千仏院、宗胤院）が曼荼羅堂の後戸から入堂する。そして、真言方が内陣を出た後、入れ替わり、法要を行う。「四方請」「開経偈」「真心観文（観無量寿経第九）」「念仏一会」などを読誦する。

午後四時一五分頃、四鐘を合図に、観音菩薩・勢至菩薩・普賢菩薩の三菩薩を除く諸菩薩と介添が護念院から橋を渡って曼荼羅堂へ入り、曼荼羅堂外陣の南側に整列する。観音菩薩・勢至菩薩・普賢菩薩は、面を外した状態で、少し遅れて曼荼羅堂へ入り、南の控外陣で面をつける。真言方の僧侶は花筵場に着座すると、法要を営む。「三礼」「洒水」「伽陀」など。

娑婆堂への往路

浄土方は法要が終わると、浄土方の僧侶（一名）が先導し、稚児行列そして楽人の行列が来迎橋を渡って娑婆堂へ向かう。その後ろに、浄土方の僧侶の行

列が続く。

浄土方の僧侶が来迎橋を渡り始めた頃、真言方の花筵場での法要が一時中断し終わり、真言方の楽人によって雅楽が奏される。その雅楽が終わると、来迎橋を歩く浄土方の楽人による雅楽の演奏が始まる。

来迎橋を渡る浄土方の僧侶が金堂・講堂前を過ぎた頃、花筵場の真言方の僧侶が「理趣経（大楽金剛不空真実三摩耶經 般若波羅蜜多理趣経）」「仏讃」などを唱え始める。

行列が娑婆堂に到着すると、稚児は堂内土間の北側、楽人は南側に着座する。浄土方の僧侶は、板敷に上がる「図5」。

観音菩薩・勢至菩薩・普賢菩薩の三菩薩を除く諸菩薩の行列は、浄土方の僧侶の列の後端が、来迎橋の中ほど、くの字に曲がったあたり（曼荼羅堂から一六枚目の橋板）まで進んだのを確認すると、曼荼羅堂を出発する「図5」。先頭は、天童（二人）で、地藏菩薩と龍樹菩薩が続く。天童と諸菩薩はいずれも、



写真20 控外陣で面をつける直前の三菩薩



写真21 浄土方の僧侶が曼荼羅堂を出発する



写真22 稚児、楽人、浄土方僧侶の行列

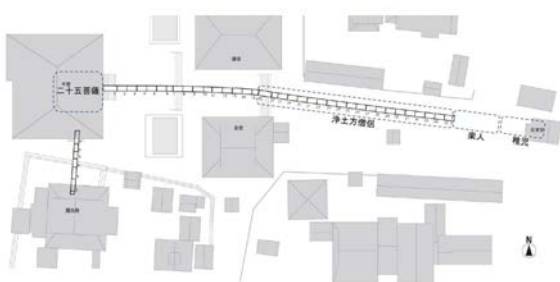


図5 稚児・楽人・浄土方僧侶の位置図（往路）

介添に腕を引かれながら歩く。来迎橋から地上に降りるところでは、面を被って足元が見えない菩薩のために、當麻組の人が橋板を叩いて音を出すことで、橋の終わりを知らせる。諸菩薩の行列は橋板でおよそ二十五枚分に及ぶ「図6」。

三菩薩の登場と奉奏舞

観音菩薩・勢至菩薩・普賢菩薩の三菩薩は、諸菩薩の行列の後端が、来迎橋の中ほど、くの字に曲がったあたり（曼荼羅堂から一六枚目の橋板）まで進んだのを確認すると、来迎橋を渡り始める。この三菩薩のうち観音菩薩・勢至菩薩には介添えはつかず、外陣の正面から、所作を始める。縁から橋板まで段が一段あり、縁の端を當麻組の人が拳で叩いて音を出し、段差があることを三菩薩に知らせる。観音菩薩の所作は、両手で小さな蓮台を捧げ持ち、一歩踏み出すごとに大きく腰を落としながら蓮台もった腕をいったん下げては右へ高く上

げ、次の一步では下げた蓮台を左に高く上げる。ちょうど、一步ごとに蓮台を左右に蓮台を捧げるような所作を繰り返すのである。これが、法如（中将姫）化生坐像を蓮台に掬う（救う）ような仕種であることから、俗にスクイボトケとも呼ばれる。

次に続く勢至菩薩は、合掌した両腕を観音菩薩と同じよう左右に大きく振りつつ、腰を落とす。勢至菩薩は、持物は持たず合掌し、前を行く観音菩薩の足運びや動きを確認しつつ、観音菩薩が蓮台を右に振るときには、勢至菩薩は逆に合掌した手を左に振るように動きを合わせる。この勢至菩薩については、オガミボトケとも呼ばれる。

勢至菩薩に続く普賢菩薩は、介添えが付き添い、天蓋をもって進む。

三菩薩が来迎橋を渡り始めた頃、花庭場の真言方の僧侶の法要が終わり、真言方の衆人による雅楽が奏される。

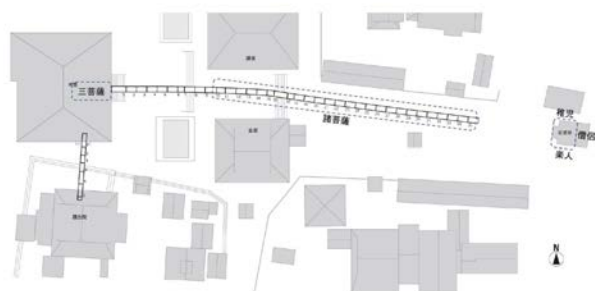


図6 諸菩薩の位置図（往路）

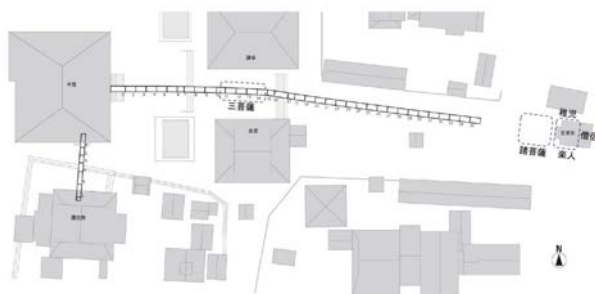


図7 観音菩薩、勢至菩薩、普賢菩薩の位置図（往路）



写真23 帰路の行列

諸菩薩が娑婆堂前に整列し終える頃、三菩薩の先頭は来迎橋の中ほどに至る「図7」。三菩薩の、来迎橋を通って娑婆堂までの行道は、約十五分ほどかかる。浄土方の僧侶が娑婆堂に到着すると、法要が始まる。「念仏一会」「開経偈」「来迎和讃」「念仏」などが誦読される。

観音菩薩が、来迎橋の最後の橋板まで来た頃、護念院住職が「来迎和讃」の朗誦を始める。

三菩薩が娑婆堂へ着くと、観音菩薩・勢至菩薩は、和讃の詞章に合わせた所作をおこなう。まず、役僧が娑婆堂の中央に安置されている奥の中の法如坐像の像内から中将姫の化身とされる法如（中将姫）化生坐像を取出し、観音菩薩が奉持する蓮台に移す。その後、観音菩薩と勢至菩薩は蓮台を挟んで向き合った状態で、勢至菩薩が法如化生坐像の上に片手を翳して揺らしながら撫でるような所作を行い、往生を讃える。そして、もう片方の手でも同様に撫でるような所作を行った後、勢至菩薩は観音菩薩の持つ蓮台に手を添え、観音菩薩と勢至菩薩が揃って蓮台を左右に数回、大きく揺らす。そして、最後は勢至菩薩が蓮台から手を放し、その勢いで観音菩薩が曼荼羅堂の方を向き、そのまま往路と同じ所作をしながら曼荼羅堂へ向かう。この一連の所作を「奉奏舞」と呼ぶ。

この娑婆堂での儀礼は、中将姫の魂を迎えるという意味を表現しており、諸菩薩とともに曼荼羅堂が表す西方極楽浄土へ戻るといふ演出がなされている。

曼荼羅堂（極楽堂）への帰路

観音菩薩と勢至菩薩は、往路と同じ所作で来迎橋を渡って曼荼羅堂（極楽堂）へ帰っていく。その後ろを普賢菩薩、以下、地藏、龍樹の順で諸菩薩が、さらに

天童二人、稚児行列と続く。その間、読経の声が聞こえる。稚児行列の後ろの楽人が極楽堂へ歩き出す頃、雅楽の演奏をはじめ。楽人の後ろは、浄土方の僧侶が続く。

真言方の僧侶は、奉奏舞を見届けると「阿弥陀如来根本陀羅尼」を誦誦し、唱え終わると、曼荼羅堂の内陣を通って後戸から退堂する。

真言方の楽人は、「阿弥陀如来根本陀羅尼」が始まると雅楽を奏し、真言方の僧侶が退堂しても残り、三菩薩が来迎橋の中程に来る頃まで演奏を続ける。

観音菩薩の蓮台には、往路と違って法如化生坐像が載せられており、聖衆とともに西日が輝く西方極楽浄土（極楽堂）に向かうという演出となっている。

一七時頃、三菩薩が曼荼羅堂へ到着する。観音菩薩と勢至菩薩は、内陣の手前まで所作を続け、當麻組の人に法如化生坐像を預ける。その後、十分ほどして、浄土方の僧侶が曼荼羅堂に到着し、内陣に入る。

中将姫の輿の帰路

行列がすべて曼荼羅堂へ到着したところを見計らい、中将姫を載せて娑婆堂へ運んだ輿が、娑婆堂を出発し、来迎橋をわたり、曼荼羅堂の正面石段から地上へ下ろし、護念院に戻る。その際、花庭場の真言方の楽人が雅楽を奏し、輿が来迎橋を渡り終える頃に終了して内陣を通って退堂する。法如坐像の輿の帰路は行道の構成要素ではなく、以前は橋を使わずに運んでいたが、観客の安全のために橋を使うようになったという。

一七時二〇分頃、曼荼羅堂の外陣での一般参拝が可能になる。

その後、菩薩の着替え、用具の片付け、舞台の解体、来迎橋の解体が行われる。

5 「面乾し」

かつて、五月十四日に練供養が行われた翌十五日には、使用した菩薩面・天

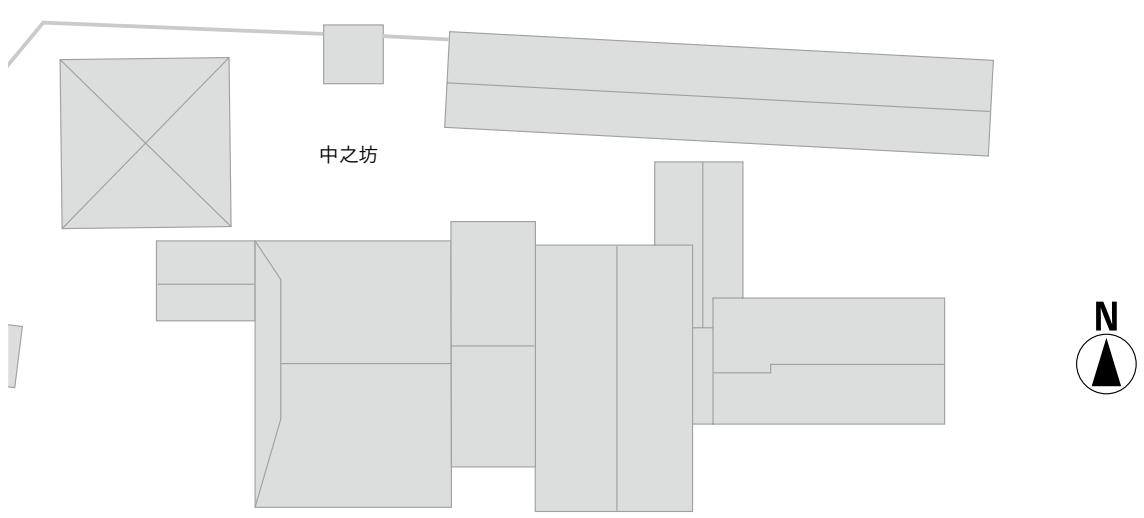
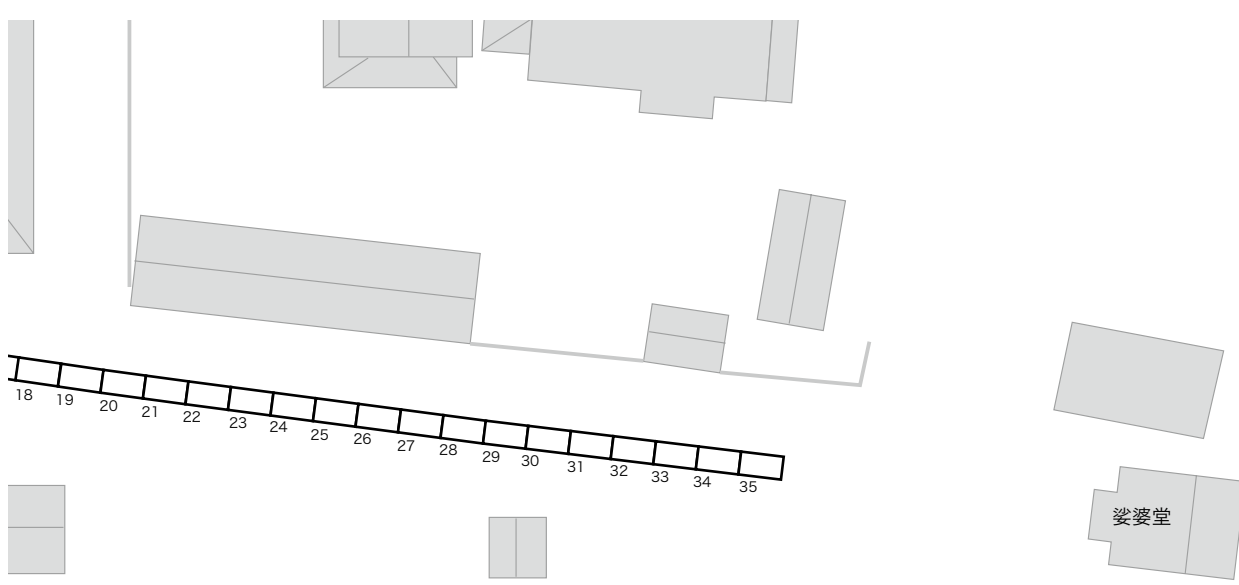
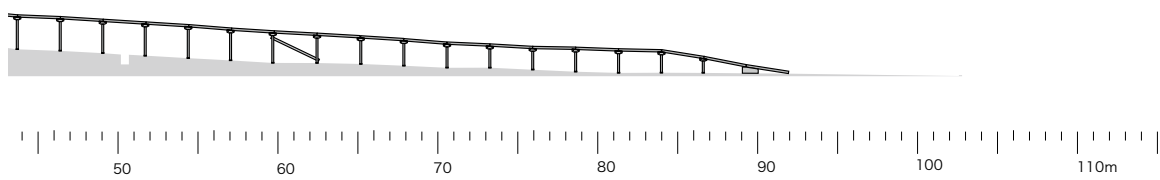
人面などを干し、それを一般に公開していたという。これを「面乾し」と称し、少なくとも戦時中までは行われていた。

また十四日の前日の十三日は「宵まつり」として近郊より曼荼羅堂を参拝する人たちが群参したという。つまりは、練供養会式を中心に五月十三日、十四日、十五日の三日間は、當麻寺としては曼荼羅堂内陣裏の板曼陀羅、護念院では菩薩面や中将法如像を特別拝観できる時期として、知られていたのである（井東史郎「当麻の廿五菩薩練供養会」）。

参考文献

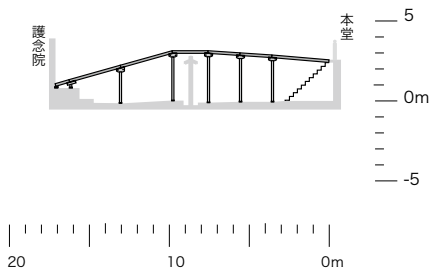
- 井東史郎「当麻の廿五菩薩練供養会」（『大和古寺行事・改訂版』、佐伯啓造編、鶴故郷舎出版部、一九四四年）
- 河中一學『當麻寺私注記』（雄山閣出版、一九九九年）
- 〔映像〕「當麻寺の練供養―二十五菩薩来迎会―」（當麻町教育委員会、一九八三年度）
- 〔映像〕テレビ放送「ダイドードリンコスペシャル莊嚴！誇り高き男たちの絆 聖衆来迎練供養会式」（MBS毎日放送、二〇一五年）

（写真・文責 福持昌之）

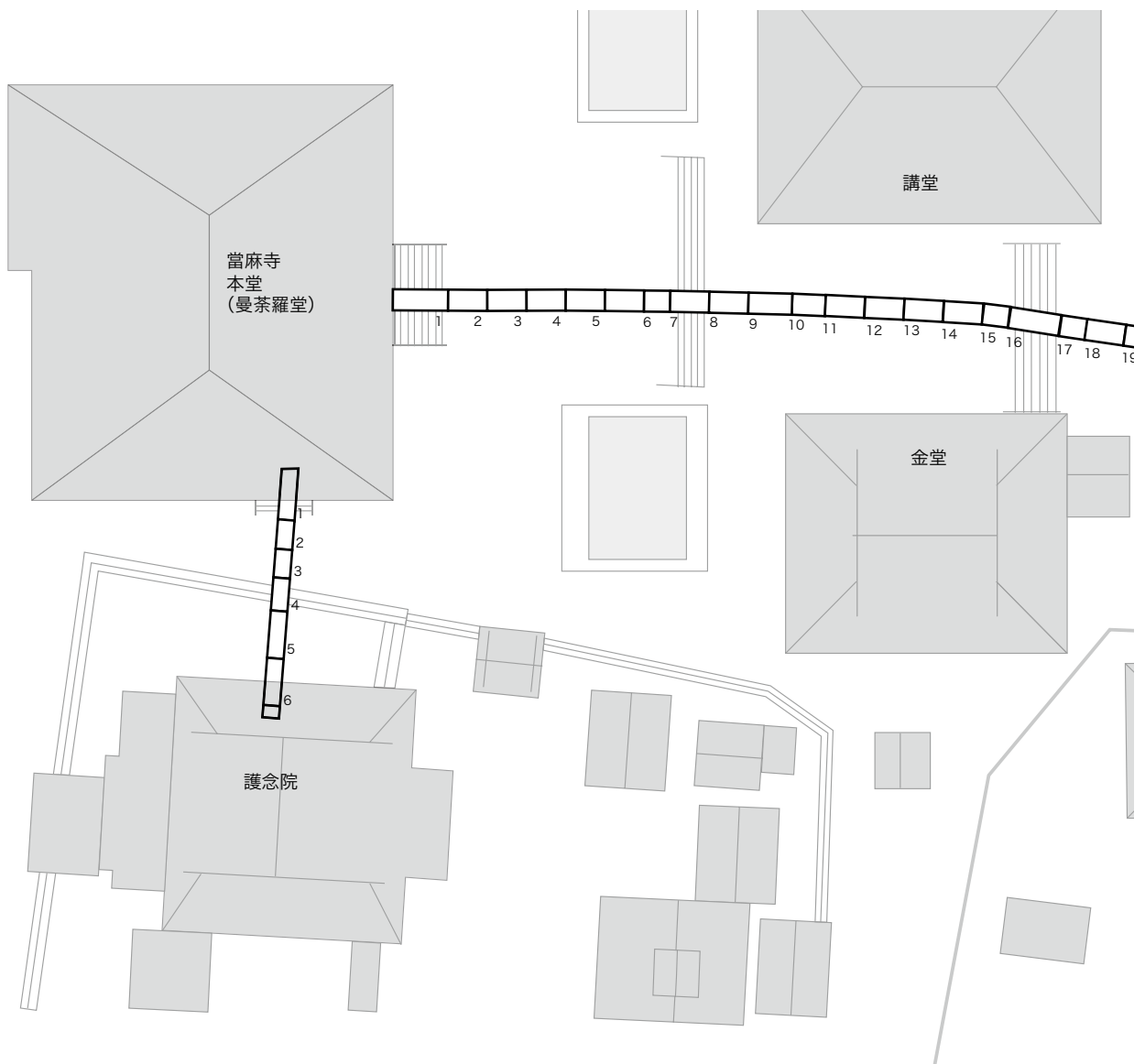
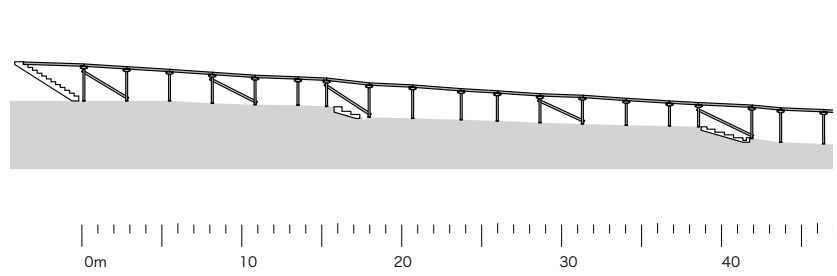


■来迎橋の概念図

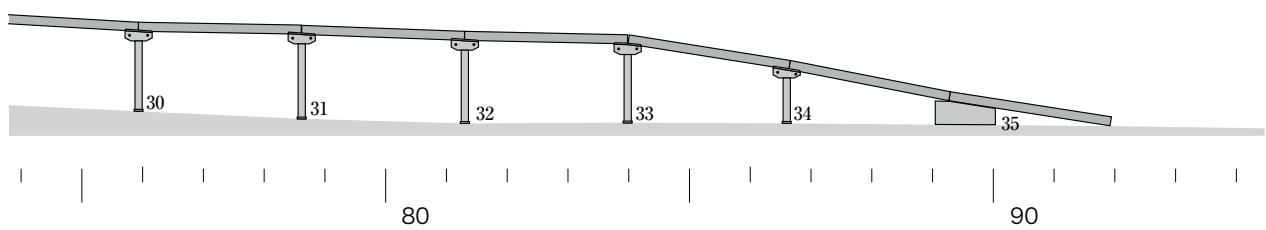
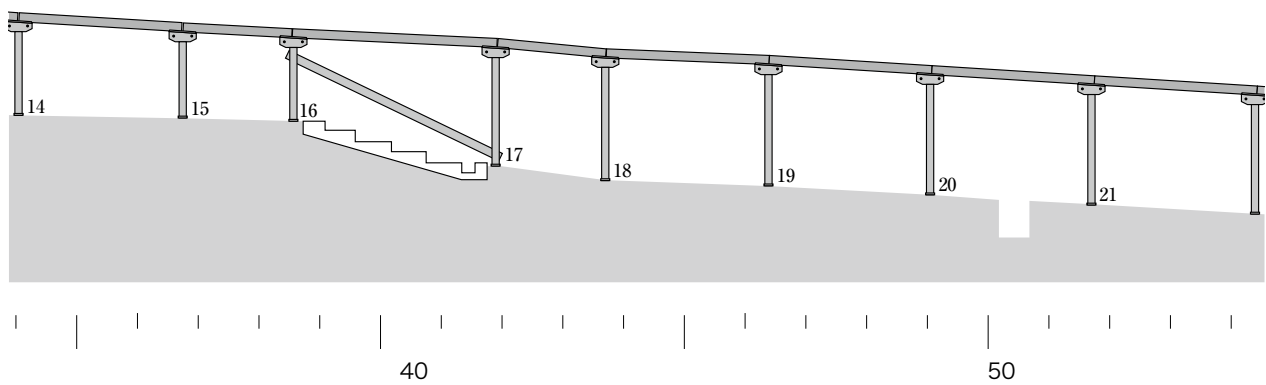
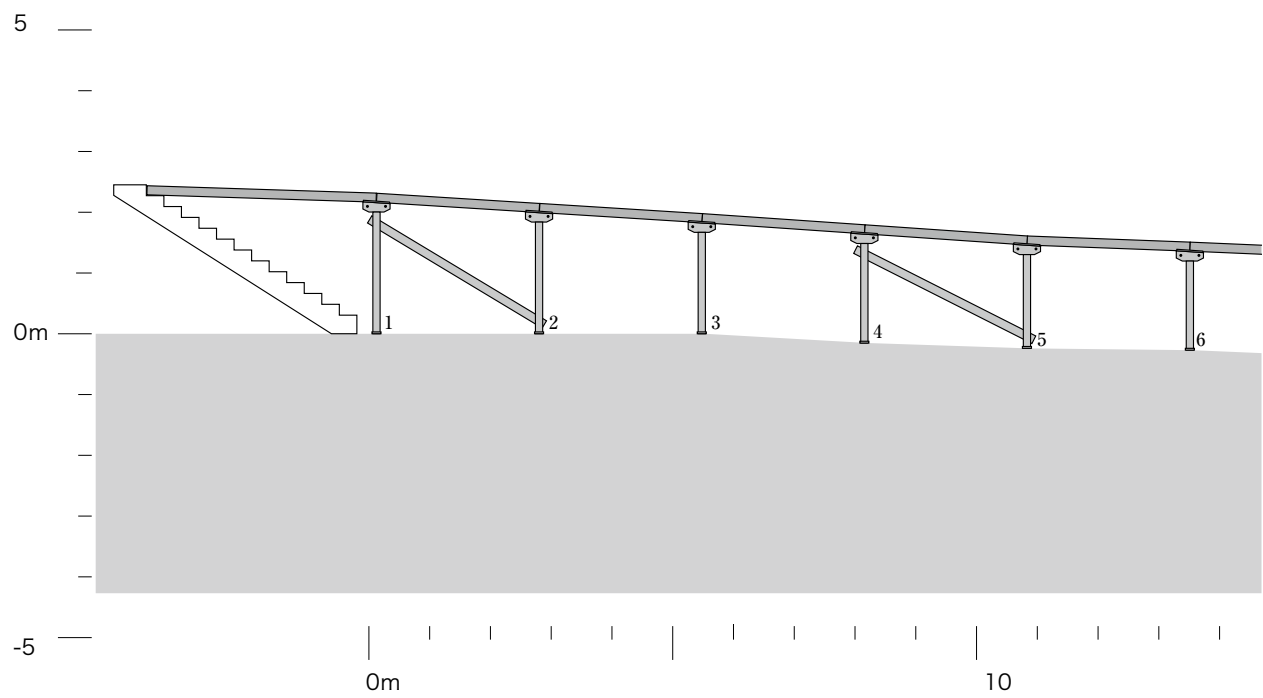
■護念院～本堂間の側面図



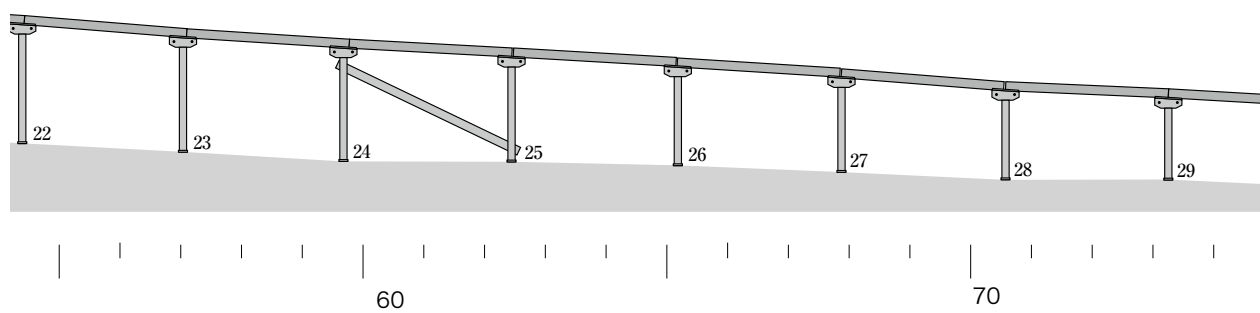
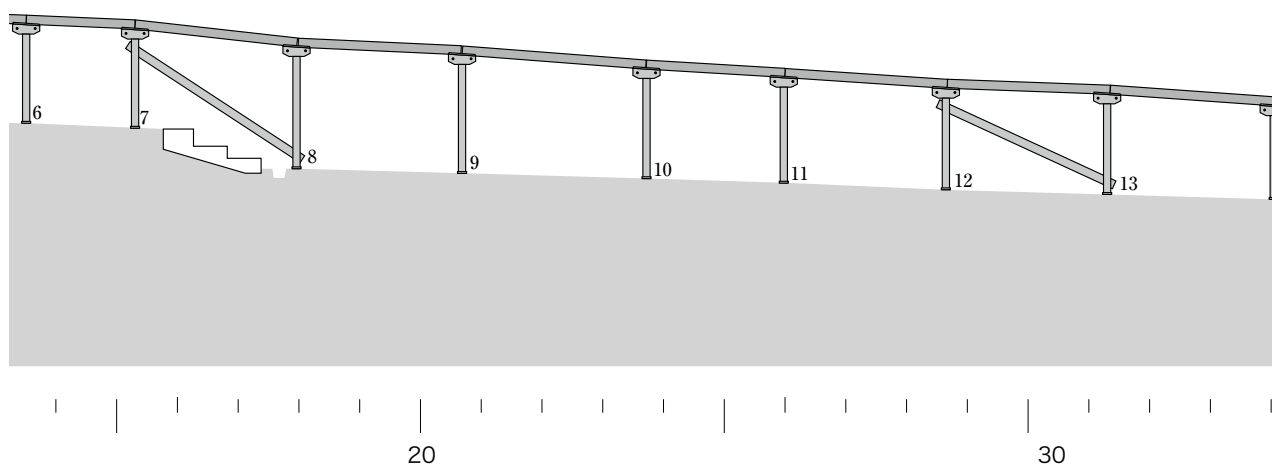
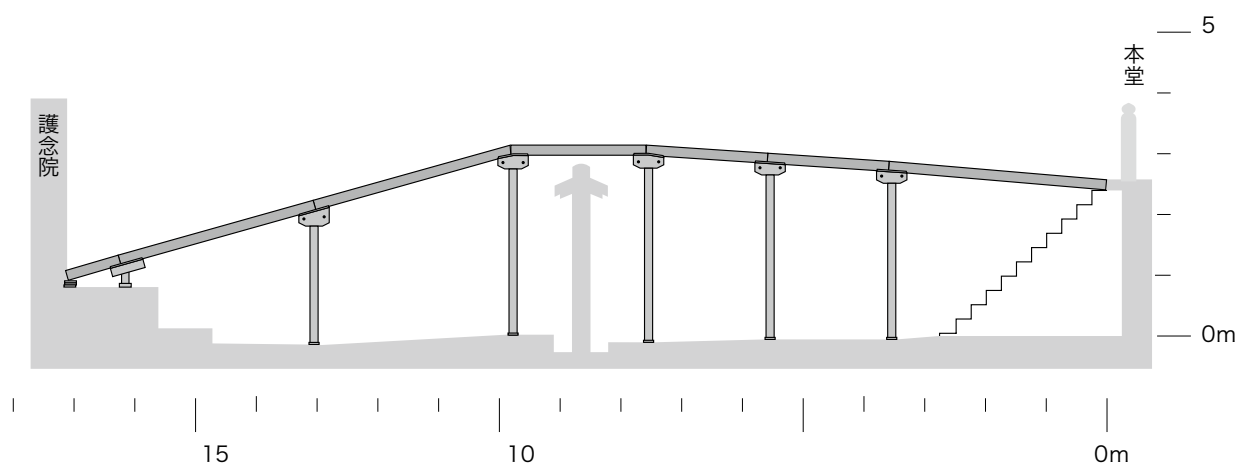
■本堂～娑婆堂間の側面図



■来迎橋（本堂～娑婆堂間）の側面図



■来迎橋（護念院～本堂間）の側面図



第五章 練供養会式における所作と芸態

― 観音菩薩・勢至菩薩を中心に ―

1 記録された所作

(1) 『當麻寺縁起』にみる所作

現在のような當麻寺練供養会式が、いつごろから行われていたかについては、詳らかでない。ただ、平安時代の迎講（迎接講）が、その起源であるというのが定説である¹。平安時代末期の『今昔物語』十五ノ廿三には、丹後国で迎講を行うにあたり、京から舞人・楽人らを招き、楽を奏する菩薩とともに、紫金の台を持った観音菩薩の行列を仕立てたとある。

いわゆる「二十五菩薩和讃」は、源信作と伝えられるものの、歴史学においては、南北朝期以前には遡りえないものとされており、當麻寺の来迎会は室町時代以降に創始されたものという見方がある。史料上では、『大乘院寺社雜事記』長祿三年（一四五九）四月十四日に「今日當麻寺迎講云々、毎年不退会云々」、明応九年（一五〇〇）四月十四日に「當麻寺迎講也、為結縁藤千代昨日下午向了」とある。また、永正四年（一五〇七）五月二十三日に東北院での曼荼羅供養について「新万タラ蜜供養ハ以前在之、是ハ顯供養也」とあるのは、顯密二様つまり、現在の浄土宗の僧と真言宗の僧がそれぞれ別の形で法要に関わる姿を彷彿とさせるものと言われている。

その頃の當麻寺の迎講を描いたとされるのが、『當麻寺縁起』下巻の第七段である。この段は、享祿五年（一五三二）正月十五日に、三条西実隆が詞書を書いたものであることが『実隆公記』に明記されている。そこには、僧が居並ぶ娑婆堂の前に、合掌する法如尼坐像が卓に置かれ、その像に向かって合掌する勢至菩薩を先頭に、蓮台を捧持する観音菩薩、天蓋を持つ普賢菩薩、そして楽器や香炉などを手にした諸菩薩が列をなして迎えにやってくる光景が描かれ

ている。

(2) 大正・昭和初期の所作

大正期の當麻寺練供養会式について、奈良女子高等師範学校の豊田八十代が、郷土史家の高田十郎から資料提供をうけて執筆した『奈良の年中行事』³に記している。それによると、本堂と娑婆堂との間に、幅一間（約一・八m）の橋が架けられること、本堂の縁に奏樂場（カエン場）が設けられること、往路は午後四時二十分、帰路（練返し）は五時十分からだったことなどがわかる。行列の順序は、先駆、浄土宗僧侶、二十五菩薩、そして観音・勢至・普賢の順である。観音菩薩と勢至菩薩の所作については、次のように記されている。

更に五分許にして観音勢至普賢の練りつゝ、來るを見る。観音は蓮臺を捧げ、勢至普賢は幡を持ち、物をすくふが如く、両手を左に突き出しては右に反すとともに体をねぢつゝ、進む。

つまり観音菩薩が、蓮台を持つ両手と同時に、体も左右に振りつつ歩く様子が記されている。勢至菩薩は普賢菩薩とともに幡を持つとあるが、『當麻寺縁起』の描写を考えると、誤記の可能性もある。

昭和初期の當麻寺練供養会式について、歌人の岡田弘子が『古京の芝草』⁴に記している。それによると、本堂と娑婆堂とを結ぶ橋は、一丁（約一〇九・〇九m）ほどとあり、橋の幅は一間と大正期と変わらない。本堂の縁に奏樂場（花筵場のことか）があることについても触れている。さらに、面と装束をつけた二十五菩薩に介添がついて橋を渡ることがわかる。観音菩薩と勢至菩薩の所作については、次のように記されている。

長く垂れた天衣を兩腕にまっはらせながら観世音菩薩は先頭に立つて、兩

手に捧げた蓮臺を左に突き出し、右に掬ひあげるやうにして、身體を左右に振ぢ曲げながら渡つてきた。つゞいて緑衣の鼻先の鱗けた勢至菩薩だ。兩手を組み合はせて、それを矢張り掬ふやうな格好に、先頭の觀世音菩薩とは反對側に動かしながらやつてきた。次は普賢菩薩だ。龍頭の幟を抱へてきた。

(中略)

現身往生の中將姫を娑婆世界から極樂淨土に迎へやうとした時に、觀世音菩薩と勢至菩薩との間に、中將姫奪ひ合ひのはげしい争闘が行はれたといふのだ。遂に觀世音菩薩が勝つて、さつき兩手で捧げてゐた蓮臺のうへには中將姫の佛生が載つてゐた。

残念なことに、岡田は中將姫を蓮臺に載せる場面は見えていない様子だが、人づてに聞いたのであろう。觀音菩薩と勢至菩薩が中將姫を奪ひ合う所作があると理解しているのは面白い。また、二上山に沈む西日に西方淨土を想起させる演出について触れられていない点も留意したい。

(3) 所作の詳細な記述

當麻寺練供養会式の次第と所作について、管見の限り最も古くかつ詳細な記述は、昭和十九年(一九四四)の井東史郎「當麻の廿五菩薩練供養会」である。少し長くなるが、觀音菩薩・勢至菩薩の所作に関する部分を抄出する。

四番鐘が鳴る。愈よ來迎聖衆が繰り出される。天人二人が先行する、次に錫杖をついて地藏菩薩が歩み出る。次の圓頭が龍樹菩薩である。其の後へ各自持物も別々の金色燦たる面像の廿五體の菩薩が次から次へと行列をなし。此の廿八部衆が渡り架橋に全部一列縦隊に並んだところはほんたうに見榮えのする動く佛畫とでも申すべきであらう。先行の天人が長い架

橋を娑婆堂へ渡りついた頃には堂内ではや來迎和讃がよみ上げられてゐる。其の音節は世間一般のものとは別な「當麻節」と稱せられる特異な節まはしである。和讃がだん／＼詠まれて

ゝ時に大悲觀世音 漸く歩み近づきてゝ

といふ頃になると、觀音菩薩が娑婆堂に入り込んで來るやうになつてゐる。

そして

ゝ紫摩黄金の身を曲げて 蓮臺傾けよせ給ふゝ

の段に至り觀音菩薩が中將法如像に手をかけ其の像の胎

内佛たる小さな「勢至菩薩像」を取り出すのである。

ゝ次に勢至大菩薩 大聖悲智の手をのべて

行者の頭べを撫で給ふ 聖衆同時に讃歎しゝ

こゝに至つて觀音は往生人の頭べを撫でてのち、自ら持ち來れる蓮臺に迎へ救ひ上げるの動作よろしく行ふのであつて、此れから曼陀羅堂へ引接すべく發足するのである。

小身の勢至菩薩像こそ「生身の中將法如」であり、娑婆堂を此の世にあてられてゐる。そして極樂界に當て嵌められたる曼陀羅堂へ往生し行くところがこれから演ぜられるわけである。法如の本懷を遂げられた法悦の情を表現すべく、且つは菩薩來迎引接の歡喜の體相が次いであらはされやうといふのである。

極樂(曼陀羅堂)への歸り道は來迎の際の逆で觀音が先發第一を承るのである。前にも申す如く此の菩薩は蓮臺に生身の中將法如を迎へてこれまた歡喜の情抑へがたきかの如く身ぶり手ぶり面白くおかしく其の足どりも一歩進んで半歩退き且つ悠々として靜かに徐々に進み行くのである。山内を埋めつくす善男善女の衆目が一齊にこゝに集注されることは申すまでもない。芝居で申せば此の觀音は主役である。此れに續く勢至菩薩も合掌し

乍ちまた歡喜の身ぶりをなす。大衆はまたそれに目を移すこと申すまでもない。

ここでは、観音菩薩と勢至菩薩の娑婆堂へ往路の様子には触れておらず、行道において所作があつたかも不明である。ただし、帰路は往路と逆に観音が先頭を行くところなので、往路は二十五菩薩の最後尾に観音菩薩や勢至菩薩が位置していたことはわかる。

注目すべきは、娑婆堂での様子と、帰路の所作の記述である。来迎和讃が、當麻節と呼ばれていること、そして、その詞章と観音菩薩の所作が同期している。また、観音菩薩の曼荼羅堂への行道は、生身の中將法如を迎えた歡喜を表す所作であるとする。

ただし、「紫摩黄金の身を曲げて 蓮臺傾けよせ給ふ」の詞章では観音菩薩が中將法如像内から化生像を取り出す際、これを勢至菩薩像と記したのは誤解であろう。

次に、昭和五十一年（一九七六）の『当麻町史 続編』の記載を見てみよう。

主役をのぞいた菩薩がまず、娑婆堂に到着したところ、観音・勢至・普賢の三菩薩の登場となる。これがこの行事のクライマックスである。菩薩に扮した古老の話によれば、昔は橋の下から「南無阿弥陀仏」と唱える戸がしきりに聞こえていたという。観音菩薩は蓮台をもち、勢至菩薩は合掌し、普賢菩薩は天蓋をもつて、体をねりうごかしながら娑婆堂へと進んでいく。娑婆堂につくと、勢至菩薩は堂の中央におかれていた法女尼像の像内から宝冠阿弥陀坐像をとりだし、観音菩薩の捧げる蓮台の上にのせる。さらに勢至菩薩はその像をなでる所作をした上、観音・勢至が揃って「奉奏舞^{ほうそうぶ}」を舞う。そして帰りは観音・勢至・普賢が先頭になり、諸菩薩・僧侶・輿

とつづいて極楽堂へ帰っていくのである。

ここでも、往路については詳らかではなく、娑婆堂での儀礼と帰路の行道の所作が記されるのみである。ただし、娑婆堂での観音菩薩、勢至菩薩の所作を「奉奏舞^{ほうそうぶ}」と記しているのは注目すべきである。

河中一學「練供養会⁶」による次第は、非常に充実した内容であるが、特に所作についての記述のみ抄出する。

二十五菩薩の一行が娑婆堂に着いた頃合いに、いよいよ「お練り」がじまる。当日のシテ役の観音菩薩が、両手で小さな「蓮坐」を捧げて身体を左右に振じりながら（左に振じるときに右足を前に出し、右に振じるときに左足を前に出す）、中將姫を蓮坐に掬（救）うような仕種で踊るように行道する。次のワキ役の勢至菩薩も、合掌したままで、身体を振じりながら行道する（勢至菩薩は観音菩薩が身体を左に振じれば反対に右に振じる）。そこで観音菩薩を「スクイボトケ」、勢至菩薩を「オガミボトケ」とも呼ぶ。殿^{しんが}を勤めるツレ役の普賢菩薩は、天蓋をもつて進む。

こうして、さきに娑婆堂に安置されてある中將姫の像のもとへと来迎するのである。この三尊が娑婆堂に着くころから、『和讃』の説経がひとしきり盛大となる。しかし、観音・勢至菩薩の二尊だけは静止することなく所作事続け、勢至菩薩が法如尼像を観音菩薩が奉持する蓮坐に移す。その後、勢至菩薩はその像の上に手を翳して往生を讃える所作事を行いながら、揃って「奉奏舞」をゆるやかに舞う。こうして中將姫の生身の魂を迎えたことになり、諸菩薩は再び極楽浄土へ戻ることとなる。

娑婆堂から極楽堂への帰り道は、蓮坐の上に中將姫の小さな像を奉持した観音菩薩を先頭に、勢至菩薩とともに大きな身振りで往生の喜びを表現

しながら、あるいは右にあるいは左に仏の方を合掌拝しながら来迎橋を戻
る。

ここでは、観音菩薩の行道の所作が往復ともにあること、「左に振じるときに
右足を前に出す」と具体的に示されている。そして、掬うような仕草から「ス
クイボトケ」、合掌の姿から「オガミボトケ」の称がある点も指摘している。

2 仏としての所作

(1) 仏の所作としての特徴

記紀神話などに生き生きと描かれる神と違い、仏は来臨するのみで功德が得
られる存在として扱われることが多い。つまり、神楽などで神々が表現される
のと違い、仏菩薩を演じて表現することは、それほど必要とされなかった。

仏を演じるわずかな例のひとつが、能の「大会」である。ただし、ここに登
場する釈迦如来は天狗が化したものであり、いわば特殊な仏である。この演目
は室町時代から上演されており、慶長元年（一五九六）成立の『童舞抄』に金
春流の型付が記されている。しかし、その内容は「いかにも殊勝なる心を持て
出る也。釈迦如来のこゝろ也」とあるのみで、具体的な所作についての記載は
ない。

人が菩薩面を被って菩薩となり、舞や所作を演じるものとしては、舞楽の「菩
薩」が知られる。しかし、これは平安時代末までに失われており、今となって
はどのようなものであったのは判然としない。ただ、全国の民俗芸能のなか
に、菩薩の舞の影響を受けたとされる「仏舞」が現存している。現在、仏舞と
して行われているものは、おおよそ下の表の通りであるが、例えば福井県福井
市の「糸崎の仏舞」、京都府舞鶴市の「松尾寺の仏舞」、和歌山県かつらぎ町の
「花園の仏の舞」などが代表的なものといえよう。

仏舞一覧

名称	演目名	所在地	上演場所
大日堂舞楽	五大尊舞	秋田県鹿角市八幡平	大日霊貴神社
遠江森町の舞楽 (小國神社の舞楽)	菩薩 (色香)	静岡県周智郡森町一宮	天宮神社
遠江森町の舞楽 (天宮神社の十二段舞楽)	菩薩 (色香)	静岡県周智郡森町天宮	小國神社
田峯田楽 (昼田楽)	仏の舞	愛知県北設楽郡設楽町田峯	高勝寺
鳳来寺田楽	仏の舞	愛知県南設楽郡鳳来町門谷	鳳来寺
懷山のおくない	仏の舞	静岡県天竜市懷山	泰蔵院
糸崎の仏舞		福井市糸崎町	糸崎寺
松尾寺の仏舞		京都府舞鶴市松尾	松尾寺
聖霊会舞楽	菩薩	大阪府天王寺区四天王寺	四天王寺
花園の仏の舞		和歌山県伊都郡かつらぎ町梁瀬	遍照寺
隠岐国分寺蓮華会舞	仏舞	島根県隠岐郡西郷町池田	隠岐国分寺

「糸崎の仏舞」は、唐の高僧・
禅海が千手観音を安置した際、菩
薩や天女が舞い降りて喜びの舞を
舞った様子を表している。舞仏と
呼ばれる素手の手仏（四名）、左
手に振鼓、右手はハシ（桴）、腰
に鼓をつけた打鼓仏（二名）、腰
に羯鼓を付け、両手にハシを持っ
た撥仏（二名）が登場する。舞台
では、内側に向き合い、足を左右
に広げ、左右に体を揺らしながら
少し足も踏み出すと、いったんゆっ
くり中腰になるという動きが基本
である。舞いながら、だんだんと
仏が退出していく演出となっている。

「松尾寺の仏舞」は、威光上人
が観音菩薩を感得したことを、釈
迦如来、大日如来、阿弥陀如来（各二人、計六人）が喜んだ様子を表す。釈迦
如来は腰鼓をつけ、両手に桴を持つ。大日如来は左に振鼓、右手に桴を持つ。
阿弥陀如来は素手である。舞台までの行道に楽はなく、ゆっくりとした歩みで
進む。舞台では、仏たちは雅楽に合わせて両腕を上下に廻す。外舞（背中合わ
せになって外を向く）、内舞（向かい合う）を繰り返し、楽器を叩く所作や、
印を結ぶ所作がある。

「花園の仏の舞」は、龍宮の乙姫を浄土へ迎えるため、大日如来、釈迦如来、

阿弥陀如来、薬師如来、阿闍梨の五人仏が、仏の舞を見せるといふものである。笛の音に合わせて、仏たちはすり足で左右交互に踏み出し、その度に体の向きを一八〇度変える。両腕で板塔婆を持つが、時折、腕を大きくゆつくりと伸ばして回すこともある。仏の舞を見た鬼たちは「太平楽の舞」を舞う。そこでは、鬼は太鼓と鉦で囃されるなか、足を踏み鳴らし、刀や櫛を上下に振る直線的な動きをしていることが対照的である。

これらのほか、神楽や田楽の演目としての仏舞も知られているが、練供養の菩薩と共通点を見出せそうなこれらの仏舞に共通するのは、直立の姿勢が基本であって、比較的ゆつくりとした動作で、かつ動きのパターンが少ない（様式化している）という点である。菩薩面を被ると視界が極端に狭くなり、また人によっては息苦しさを感じることから、必然的に動きに制限がかかるという指摘もあるが、それでは面を被った鬼や獅子などの非常に激しい動きについて説明できない。やはり、仏像のイメージが投影されるのは、抑制された動きにこそあって、そこに仏性が伴うものと考えられてきたのであろう。

一方で、菩薩には、複数の菩薩との連携した動作が求められている。つまり、動きが揃っている美しさが、神々しさを演出しているのである。その点で、動きの目安となる音楽が重要な役割を担うことが多い。當麻寺の場合、行道では先頭の観世音菩薩が橋板を踏み鳴らす音がリズムを刻むが、娑婆堂では護念院住職による来迎和讃とのコラボレーションが見どころになっている。

（2）動きを大きくみせる工夫

練供養では演劇空間が屋外にあることから、遠方からでも見やすい所作であることが求められたであろう。當麻寺の観音菩薩と勢至菩薩、そして大正時代に當麻寺に倣ったという京都・即成院でも観音菩薩と勢至菩薩は、いずれも行道の際の動作は、大きく見せるように心掛けているという。

當麻寺の場合、足を大きく前に踏み出し、腰をしっかり落とすことで、立ち

上がった時点との差を大きく見せる工夫をしている。来迎橋は手すりがないうえに、面を被って足元が見えないため、演者にとっては落下の恐怖に耐える必要がある。腰を落とす大きな動作の副産物であるが、頭の位置が下がることで視点を下げることができ、多少とも近景の視野が広がる。

即成院では、もともと衣装が小さく作られており、したがって女性が演じることが多い。あまり大きく足を踏み出したり、腰を落としたりする力強い男性的な動きができず、背丈や手足の長さでも迫力に欠ける。そのため、観音菩薩が蓮台を捧げ持つ腕、勢至菩薩が合掌する腕は、肘を外に張り出すよう意識し、動作に入る直前には腕を肩から掌にかけて波立てるように動かして、これから始まる動作を予告し、印象付ける。また、動作が終わった直後も同様に波立たせ、余韻を持たせる。いわば三次元的な大きさの限界に対し、時間軸の方向へ動作を広げることで、四次元的な大きさへの転換が行われているといえよう。

3 観音菩薩・勢至菩薩の所作

（1）三菩薩の役割

當麻寺練供養会式において、観音菩薩と勢至菩薩、そして普賢菩薩の三菩薩は、當麻組の者がつとめる。特に、観音菩薩と勢至菩薩は、介添え役がつかない。

観音菩薩は、往路の行道において蓮台を捧げ持ち、娑婆堂では中将法如化生像を蓮台に戴き、勢至菩薩が中将法如化生像を撫でる所作の間、じっと待つ。そして、勢至菩薩が蓮台に手を添えて蓮台を左右に揺らした後、そのまま中将法如化生像を載せた蓮台を一人で捧げ持ちながら、帰路の行道をする。

勢至菩薩は持物がなく、往路の行道においては合掌姿で、観音菩薩の後ろを、一定の距離をとりつつ（橋板約三枚分、約七・八m）、同じリズムで歩く。娑婆堂ではまず右の掌、次に左の掌で小刻みに揺らしながら蓮台上の中将法如化

生像を撫でる所作を行う。そして、観音菩薩の持つ蓮台に手を添えて蓮台を左右に揺らした後、蓮台は観音菩薩に任せ、帰路の行道では再び合掌姿となる。

普賢菩薩は、天蓋を持つ。往路の行道において、勢至菩薩の後ろを、右後ろから介添え役に付き添われながら、一定の距離をとりつつ（橋板約二枚分、約五・二m）歩く。娑婆堂では、勢至菩薩の脇に立ち、蓮台の遥か上方に天蓋を差しかけるようにする。観音菩薩と勢至菩薩が立ち上がって、蓮台を左右に揺らす際には、後ずさりして天蓋を外す。帰路の行道でも、勢至菩薩の後ろを歩く。

これらの三菩薩は、地元の當麻組の構成員のなかで見込まれた人が、数か年連続して務める。特に近年は、観音菩薩と勢至菩薩は隔年で演者を交代するなどして、互いの役割や視点の違いを理解することで、技術の向上が図られている。普賢菩薩は、観音菩薩と勢至菩薩を後ろから観察することができ、やや若年の者が務める。

（2）三菩薩の行道とその所作

各種の来迎図では、蓮台を持つ観音菩薩が諸菩薩の先頭に描かれるのに対し、當麻寺では他の諸菩薩の最後尾からさらに四〇mほど離れ、観音菩薩、勢至菩薩、普賢菩薩だけの行列として出発する。

絵画表現のように、蓮台を持つ観音菩薩が先頭を歩いた場合、観音菩薩が娑婆世界に到着し、中将姫を迎え、極楽世界に旅立つまで、後ろに続く諸菩薩が動けない。もし、来迎橋の上で、往路の諸菩薩が立ち往生したならば、帰路の行列の行道にも支障が出る。

来迎橋が、娑婆堂の約一八mも手前で地上におりてしまうことは、諸菩薩が転回するために必要な空間を地上で確保するという重要な意味がある。それと同時に、往路は観音菩薩が最後に登場し、帰路は最初に出発することにより、観音菩薩によって中将姫を迎えられ、極楽世界へ旅立つ場面を、諸菩薩が見守

るという構図が完成する。

この儀礼空間の構成上の工夫の妙を、さらに演出するのが、三菩薩の所作であろう。

諸菩薩と違い、三菩薩の歩行速度は、来迎和讃のリズムに準拠している。特に観音菩薩と勢至菩薩は、足を踏み出すリズムが定まっている。

観音菩薩の足運びに合わせて、後ろを歩く勢至菩薩は、逆の足を踏み出すが、リズムとタイミングは同じである。

観音菩薩の足運びについて、仮に拍数を当てて整理してみると、次のようになる（⑪～⑭は、章末の図解に対応）。

(1) 足…左足を少し前に踏み出す。 ⑪

(2) 足…右足を大きく出して深く腰を落とす。 ⑫

腕…蓮台を低く下げる。

（勢至菩薩は、合掌した腕を下げる）

(3) 足…右足をすり足で引き下げ、立ち上がる。 ⑬

腕…肘を伸ばしたまま、蓮台を左に持ち上げる。

（勢至菩薩は、合掌した左に上げる）

(5) 静止 ⑭

(7) 足…右足を少し前に踏み出す。 ⑪

(8) 足…左足を大きく出して深く腰を落とす ⑫

腕…蓮台を低く下げる。

（勢至菩薩は、合掌した腕を下げる）

(9) 足…左足をすり足で引き下げ、立ち上がる。 ⑬

腕…肘を伸ばしたまま、蓮台をゆつくりと右に上げる。

（勢至菩薩は、合掌した右に上げる）

(11) 静止

(14)

このように、足運びの特徴は、単に左右順番に踏み出すのではなく、小さく一歩踏み出す際に、反対の足で大きく一歩踏み出しては引く（結果、最初の小さな一歩だけ進む）というものである。この所作は、見た目の歩幅が大きく、大きな所作となる一方で、歩行速度が緩いというものである。つまり、スクイボトケ、オガミボトケとしての意味を体現しつつも、仏舞に共通するゆったりと動きも残した動きと言える。

なお、来迎和讃のリズムに準拠している。ただし、観音菩薩が曼荼羅堂を出発する時点では、まだ来迎和讃は朗誦されていない。しかし、観音菩薩と勢至菩薩の演者は、数か年連続して務めるのが通例で、また日ごろの練習や、練初めなどを通じて、そのリズムを体で覚えている。

(3) 歩行の特色

當麻寺の練供養を写したという即成院（京都市）では、観音菩薩が蓮台を捧げて歩くが、當麻寺の足運びとは異なる。即成院の観音菩薩は、下半身は、進行方向に向かって約四五度外を向くが、上半身はさらにひねって九〇度外を向く。ただし、視線は常に進行方向に向ける。足運びの動作に入る直前、肘を張って胸の前で保持した蓮台を、肩から手首へ波打つように揺らす。そして上半身を戻しながら中腰になって両足の踵を浮かせ、両方のつま先を軸に体を逆の側に向くよう回転させ、立ち上がる際に、後ろに残った足を前に運んで、先ほどと逆方向の四五度（上半身は九〇度）を向く。その間、蓮台は腰の位置まで下げて、再び胸の位置に帰って来る。一歩が終わると、蓮台の腕を二回波打たせ、次の一歩の動作に入る。そして、この一連の足運びは、リズムを刻むのではなく、円滑に行く。女性が演じることが多いこともあり、非常にめめから繊細な歩行である。即成院の観音菩薩の左右の足運び一対（二歩）の所要時間は、

2歩の所要時間

寺院	調査年月日	場面		背景の音	秒 (6歩/3)
當麻寺	2017/4/29	練初	護念院	来迎和讃	14.0 秒
		往路	橋の上 (真ん中あたり)	娑婆堂での読経	10.3 秒
	2018/5/14	往路	娑婆堂前	来迎和讃	10.0 秒
		帰路	橋の上 (真ん中あたり)	火焔場での読経	11.6 秒
即成院	2019/5/19	往路	橋の上	御詠歌	5 秒
久米寺	2012/5/3	往路	橋の上	雅楽	6 秒
糸崎寺	2019/4/18	入場		雅楽 (太鼓)	6.3 秒
松尾寺	2019/5/8	入場		鏡	1.3 秒

およそ五秒である。

檀原市の久米寺でも、當麻寺の観音菩薩のように、蓮台を捧げて歩く。介添え役が後ろに立ち、菩薩の腰帯を握って保持することもあり、体は常に進行方向を向いている。右足を踏み出す時は、大きく右斜め前に出し、腰を落として左足を引き寄せてから立ち上がって静止する。その際、腕は肘を曲げずに蓮台を胸の位置の前方に突き出したまま、中腰になる時に蓮台を曲げた膝の先まで下してから立ち上がる。左足を踏み出す際は、その逆になる。左右の足運び一対（二歩）の所要時間は、およそ六秒である。

當麻寺の菩薩の一步とは、「二歩進んで一歩下がる」結果ともいえるべきものであるため、通常の歩行よりも時間がかかる。来迎和讃のリズムに合わせるため、歩行のリズムも変化する。練初の日は一歩でおよそ一四秒だが、

当日の歩調にばらつきがあるのは、娑婆堂への往路の出発時からしばらくは、来迎和讃ではなく、読経のなかを行道するため、観音菩薩が自身のリズムで行道するが、途中で来迎和讃が唱えられ始めると、そのリズムにあわせるため、速度が変わる。また、曼荼羅堂への帰路も、来迎和讃が終わってからは、観音菩薩のリズムに戻る。

4 奉奏舞の所作

(1) 奉奏舞と来迎和讃の関係

観音菩薩が、来迎橋を下りる直前（曼荼羅堂から数えて三三番目の橋脚附近）、来迎和讃が始まる。観音菩薩は、和讃のリズムに合わせ、一節毎に四歩進む調子で、歩みを進める。左に、和讃の詞章を、歩数に合わせて区切ったものを掲載する。なお、「寄給ふ」以降は、奉奏舞の所作が入ってくる（①から⑩は、後段の「(2) 奉奏舞の所作解説」で記す。また、①～⑩は、章末の図解に対応）。

摂取	不捨の	光明	は
念する	所を	照す	なり
観音	勢至	の来	迎は
声を	尋て	迎	ふなり
時に	大悲	観世	音
漸く	歩み	近づ	きて
紫磨	金の	身を曲	て
蓮台	傾け	寄給(1)	ふ(2)
次に	勢至	大薩(3)	埵(4)①
聖衆(5)②	同時に(6)	讃歎	し
大乘	智慧の	手を(7)	伸て(8)
行者の(9)③④	頭を(10)④	摩給(11)④	ふ(12)④
終に(13)⑤	引接(14)⑥⑦⑧	し給(15)⑨	ひて
金蓮	台に	乗給	ふ
輪	回	生死	の
旧き	里		
是時	永くへ	隔り	ぬ

(2) 奉奏舞の所作解説

- (1) 観音菩薩は、輿に向かつて左側の位置にしゃがみ、右膝をついた左立膝の姿勢をとる。その動作の際、蓮台を胸の高さまで下げつつ、蓮台を左右に揺らす。
- (2) 観音菩薩が定位置について静止すると、役僧が法如（中将姫）坐像の胎内から法如化生坐像を取り出し、観音菩薩の蓮台に載せる。
- (3) 勢至菩薩は、輿に向かつて右側の位置にしゃがみ、右膝をついた左立膝の姿勢をとる。その動作の際、合掌した手は胸の高さまで下げつつ、左右に揺らす。
- (4) 勢至菩薩が定位置について静止する。①
- (5) 勢至菩薩は、ゆっくり擦り手を三回繰り返す。②
- (6) 普賢菩薩が、勢至菩薩の左斜め後ろに立ち、天蓋を法如化生坐像の上にかかるように捧げ持つ。勢至菩薩は、擦り手を続ける。
- (7) 勢至菩薩は、合掌から右手をゆっくり差し上げる。左手は、右ひじの辺りに添える。③
- (8) 勢至菩薩は、右手を法如化生坐像の頭上にかざし、合掌に戻る。
- (9) 勢至菩薩は、右手を左肩あたりから大きく円を描くように、掌を震わせながら、法如化生坐像を撫でるような所作をする。左手は右上膊（二の腕）に添える。③④
- (10) 勢至菩薩は、下げた右手はそのまま左上膊に添え、今度は左手で掌を震わせながら、法如化生坐像を撫でるような所作をする。④
- (11) 勢至菩薩は、左手を右上膊に添え、右手で掌を震わせ、法如化生坐像を撫でるような所作をする。④
- (12) 勢至菩薩は、右手を左上膊に添え、左手で掌を震わせ、法如化生坐像を撫でるような所作をし、合掌に戻る。④ 普賢菩薩は、後ずさりし、天蓋を法如化生坐像から外す。
- (13) 勢至菩薩は、合掌した手を法如化生坐像に頭上に伸ばし、両手で上から包む

ように蓮台の下までもつていく。⑤

(14) 勢至菩薩が、観音菩薩が支える蓮台の下に手を添えると⑥、観音菩薩と勢至菩薩は同時に立ち上がって、蓮台を高く掲げる⑦。次に蓮台を輿と反対の方向に振り、輿の方に振り戻す⑧。

(15) さらに振り戻す勢いで、観音菩薩が極楽へ帰る行道が始まる⑨。観音菩薩は一歩進むが、勢至菩薩はその位置のまま、合掌した手を左右に動かす。

参考文献

- 水原渭江「嶺南松尾寺に伝える仏舞に関する研究」(『民俗文化研究所紀要』一集、民俗文化研究所、一九六四年)
- 『京都の田楽調査報告書』(京都府教育委員会編、京都府教育委員会、一九七八年)
- 植木行宣「松尾寺仏舞」(『仏教行事祭事記』5月 峰入り、瀬戸内寂聴・藤井正雄・宮田登監修、第一法規出版、一九八九年)
- 遠藤綾乃「京都府舞鶴市松尾寺の仏舞にみる舞踊構造」(『日本体育学会大会号』五一、一般社団法人日本体育学会、二〇〇〇年)
- 弓削田(遠藤)綾乃「仏舞の伝承的身体表現―身体運動学的分析と来迎思想を手がかりとして―」(『スポーツ人類学研究』一〇・一一合併号、日本スポーツ人類学会、二〇〇九年)
- 弓削田(遠藤)綾乃「仏舞における伝承的身体表現の研究」(平成十七年度学位論文、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較文学専攻)

- 1 柴田實「当麻寺と来迎会―序説―」(『当麻寺来迎会民俗資料緊急調査報告書』、元興寺仏教民俗資料研究所編、国書刊行会、一九七五年)
- 2 關信子「迎講阿弥陀像」考I―当麻寺の来迎会と弘法寺の迎講阿弥陀像―(『仏教藝術』二二二号、仏教芸術学会編、毎日新聞社、一九九五年)
- 3 豊田八十代「當麻寺の練供養」(『奈良の年中行事』、豊田八十代編、奈良明新社、一九一九年)
- 4 岡田弘子「二十五菩薩来迎の練供養」(同『古京の芝草』、立命館出版部、一九四一年)
- 5 『大和古寺行事・改訂版』(佐伯啓造編、鶴故郷舎出版部、一九四四年)
- 6 河中一學『當麻寺私注記』(雄山閣出版、一九九九年)
- 7 本願寺の坊官で素人役者ながら能の奥義を極めた下間少進が著した型付。『能楽資料集成 下間少進集I』(野上記念法政大学能楽研究所編、わんや書店、一九七

三年)に収載。長田あかね氏の御教示による。

8 四天王寺の聖霊会で行われる舞楽では、壱越調「菩薩」の曲を演奏する間に、「大輪(おおわ)小輪(こわ)」と呼ばれる所作(二人の菩薩が二回交錯して回る)だけの作法をすることで、失われた「菩薩」に代えている。

9 国指定重要無形民俗文化財「糸崎の仏舞」。福井市糸崎町の糸崎寺(真言宗智山派)で、西暦奇数年の四月十八日に開催。(二〇一九年四月十八日調査)

10 国指定重要無形民俗文化財「松尾寺の仏舞」。舞鶴市松尾の松尾寺(真言宗醍醐派)で、かつては卯月八日、現在は毎年五月八日に開催。(二〇一九年五月八日調査)

11 国選択記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財「花園の仏の舞」。かつらぎ町花園梁瀬の遍照寺(高野山真言宗)で、かつては六一年目毎の閏年十月、現在は不定期開催。(二〇〇四年十一月二十一日調査)

12 村上美登志「仏舞」追跡―育王山龍華院糸崎寺の場合―(『唱導文学研究』三集、三弥井書店、二〇〇一年)では、「純然たる「仏舞」のみを独立させて舞うものは、松尾寺(京都府舞鶴市松尾)と糸崎寺の僅か二寺」としている。

(福持昌之)

図解①～⑦

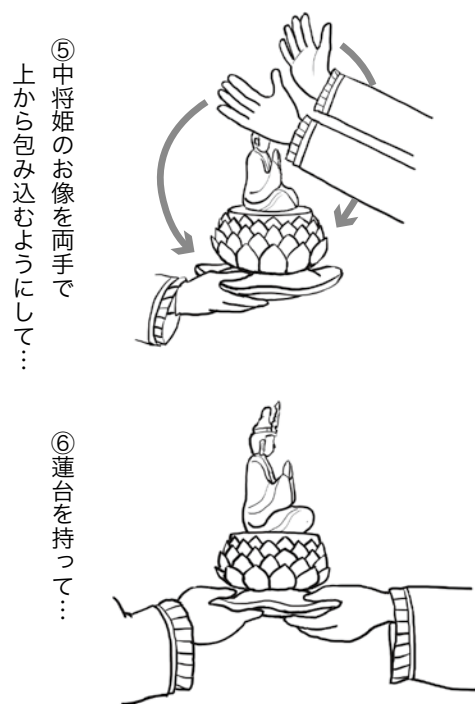


立て膝で座った姿勢から…

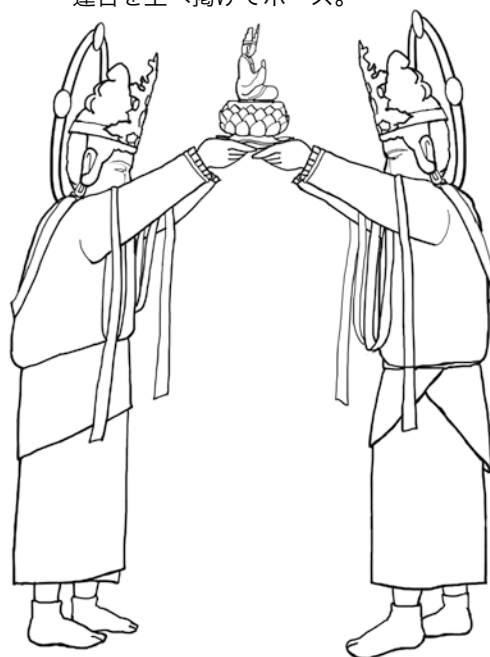


蓮台を持つ＝観音菩薩

合掌姿勢＝勢至菩薩

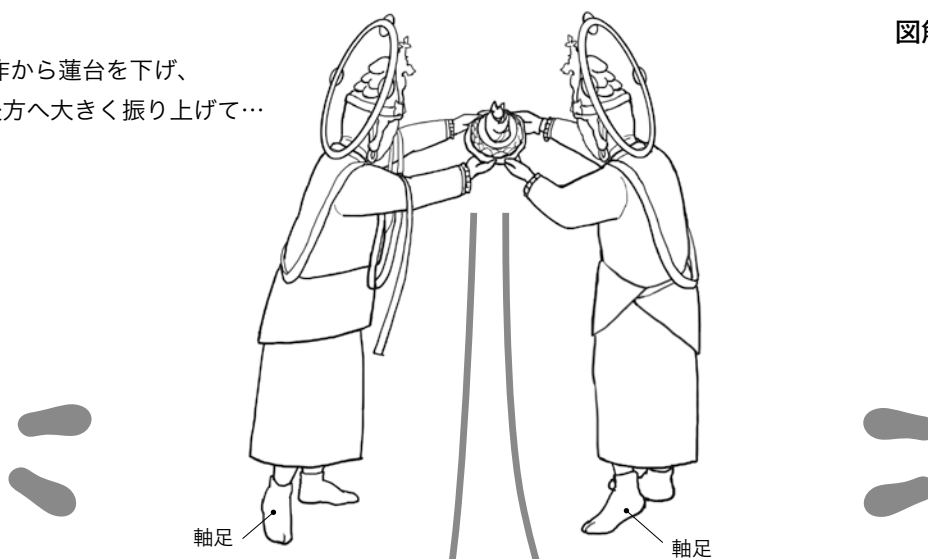


⑦ 観音、勢至菩薩ともに立ち上がり、蓮台を上へ掲げてポーズ。

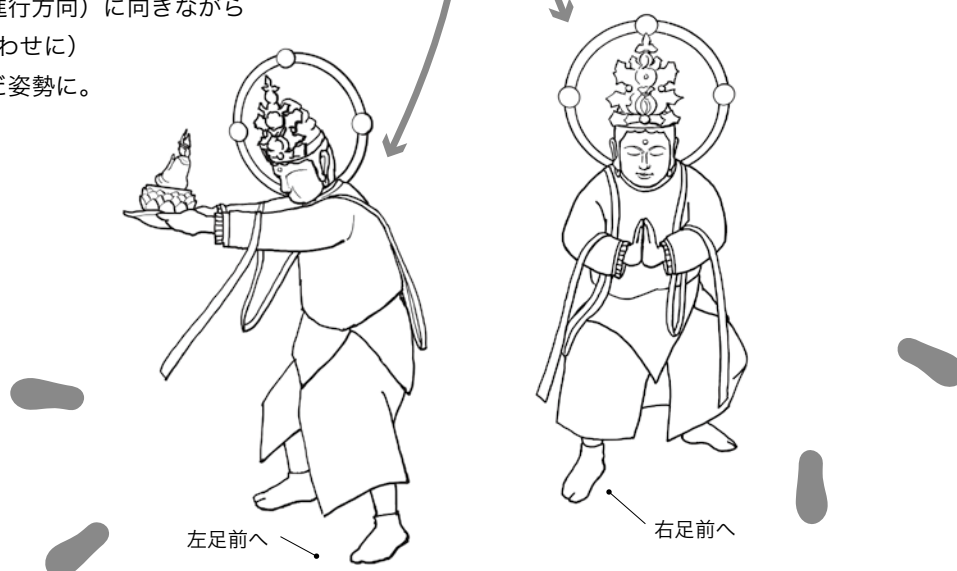


(50～53頁 作図 中川未子)

- ⑧ ⑦の動作から蓮台を下げ、
前方・後方へ大きく振り上げて…



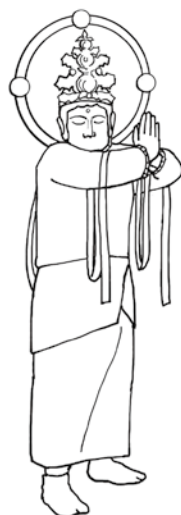
- ⑨ 正面（進行方向）に向きながら
（背中合わせに）
かがんだ姿勢に。



- ⑩ 観音は左足を引きながら
蓮台を掲げながら立ち上
がり、勢至は右足を引き
ながら合掌でポーズ。



⑪観音は左足を前へ出すとともに
蓮台を進行方向へ下ろし
ながら左足前へ。



⑫右足を出すとともに蓮台を
内側に向けて中腰に。



勢至は右足の向き
を変え…



⑬蓮台を掲げるように伸び
上がる。



左足を前に出すとともに
内側を向き中腰に。



図解⑭



⑭観音は蓮台を高く上げてポーズ。普賢は高い位置での合掌でポーズ。

▶▶ 以降⑨の所作から繰り返し。先頭の観音は蓮台を持たながら、勢至は合掌のままお互いに内向き外向きを繰り返し来迎橋を渡る。普賢はその後について歩く。